

浅野誠 旅・お出かけシリーズ7

# 旅・観光論

2013～2021年

「旅・お出かけシリーズ」は、これまで行く先別に6冊出してきたが、今回からは、行く先別に分けて、時期をまとめて編集していくことにする。なお、2013～2021年を対象にする今回は、既刊の「沖縄各地2013～2018年」収録のものを省いてある。

この時期の海外旅行は、ニュージーランドだけにとどまり、国内旅行も激減したので、このように長期間をまとめて収録した。沖縄各地旅行も激減しはじめたので、次回の刊行がいつになるかは予測しにくい。なお、「体験的観光論」は、当時務めていた南城市観光審議会会長のための、私的学習ノートを綴ったものだが、私の旅体験をもとにしているので、ここに収録した。

2021年11月刊行

# 目次

## 2018～2020年の旅

4

- 2021年11月11日 北海道の旅 自然景観を楽しむ  
 2021年11月12日 北海道の旅2 旅スタイルと人生発見  
 2020年09月30日 岐阜訪問  
 2020年03月23日 新型コロナウイルスのなか大阪旅  
 2020年02月08日 久しぶりの東京旅  
 2018年11月27日 紅葉 姫路城好古園、足立美術館、神庭の滝、六甲・有馬温泉  
 2018年11月29日 旅の印象記 雪の大山 ホテル 神庭の滝 猿 出雲大社 姫路城  
 2018年12月01日 いろいろなグループとユンタク 旅は道連れ  
 2018年09月01日 孫たちとの出会いの旅  
 2018年04月23日 出会いが多い久々の旅1 25年ぶりの卒業生 実家訪問 赤池の前の家訪問  
 2018年04月26日 出会いが多い久々の旅2 中京大学・立命館大学訪問 保育園訪問

## 旅論・観光論（2017～2018年）

18

- 2018年07月26日 旅に出かける欲求が低下  
 2018年06月30日 公共交通機関網の大胆な再編を 自動車依存ができなくなる時  
 2018年06月24日 自動車依存ができなくなる時  
 2017年12月08日 訪問者と住民との交流協同 観光を考える  
 2017年11月05日 香港と沖縄 観光  
 2017年03月20日 個人ツアー型 私の観光体験1 体験的観光論1  
 2017年03月30日 軽装 歩く 滞在体験型観光 私の観光体験2 体験的観光論2  
 2017年04月08日 観光と地元民 体験的観光論3  
 2017年04月17日 (続) 観光と地元民 体験的観光論4  
 2017年04月28日 大量消費・団体・バック型から安価・個人・フリープラン型への変化  
 観光の変化1 体験的観光論5  
 2017年05月08日 旅行目的の多様化 観光の変化2 体験的観光論6  
 2017年05月30日 日常型旅の登場 移動手段の多様化・軽便化 観光の変化3 体験的観光論7  
 2017年06月09日 宿泊施設の多様化 旅行社の苦悩と模索 観光の変化4 体験的観光論8  
 2017年06月19日 多様な交流協同としての旅 地域独自の手作り企画  
 観光の変化5 体験的観光論9  
 2017年06月28日 観光地の整備・創出 自然と暮らしの共生と観光 観光の変化6 体験的観光論10  
 2017年07月08日 旅の携行品・服装 購入物 観光の変化7 体験的観光論11  
 2017年07月19日 観光格差その1 経済資本 文化資本 体験的観光論12  
 2017年07月30日 観光格差その2 社会資本 観光者と地元民との格差 体験的観光論13  
 2017年08月08日 京都奈良の寺回り 永平寺 記憶に残る私の旅体験1 体験的観光論14

- 2017年08月19日 沖縄旅 記憶に残る私の旅体験2 体験的観光論15
- 2017年08月31日 イギリス一周とパリ訪問 記憶に残る私の旅体験3 体験的観光論16
- 2017年09月11日 ネパール 記憶に残る私の旅体験4 体験的観光論17
- 2017年09月21日 無数の名古屋—東京日帰り往復 記憶に残る私の旅体験5 体験的観光論18
- 2017年10月01日 カナダ アルゴンキンのアウトドア体験 プリンス・エドワード・アイランド訪問  
記憶に残る私の旅体験6 体験的観光論19
- 2017年10月12日 人生創造としての観光—私流観光論 連載のまとめ 体験的観光論最終回

## 2013～2017年の旅 ニュージーランド・本州・九州

46

- 2017年08月29日 ネパール教育支援の会20周年記念式典参加 久々の首都圏旅
- 2017年04月05日 父の法事で岐阜・名古屋に行く ノリタケの森で絵付け体験
- 2017年02月24日 南半球体験 星月太陽 ニュージーランド旅1
- 2017年02月27日 フィヨルド 氷河 牧場など 自然に出会う旅 ニュージーランド旅2
- 2017年03月05日 ガーデン ニュージーランド旅3
- 2017年03月10日 たくさんの発見 ニュージーランド旅4
- 2016年03月24日 子ども・孫家族と過ごした数日間の鹿児島 鹿児島旅1
- 2016年03月26日 奄美の里 鹿児島学習 穏やかな家族 鹿児島旅2
- 2016年03月28日 仙巖園 桜 桜島 散策 鹿児島学校話題 月桃活用と与論島 鹿児島旅3
- 2015年09月08日 倉敷歩き 旅1
- 2015年09月10日 岡山後楽園など 私の旅スタイル 旅2
- 2015年09月14日 神戸布引ハーブ園 旅3
- 2015年08月10日 久々に首都圏に出かける 旧東海道 川崎大師 多摩川 祭
- 2014年05月11日 セントレアからの夕陽
- 2014年05月10日 愛知・岐阜旅行 赤池の旧我が家
- 2013年12月30日 鹿児島での出来事 火山灰など
- 2013年12月28日 大宰府天満宮
- 2013年12月27日 九州国立博物館

# 2018～2021年の旅



美瑛の畑・林・山々

2021年11月11日

## 北海道の旅

### 自然景観を楽しむ

かねてからの話だったが、コロナでのびのびになっていた北海道旅が、ついに実現した。北海道から沖縄に移住してきた方のお誘いなので、すべてお任せで、私は気楽みエンジョイした。アラシックスとアラフォーのかたと私の3人旅なので、私は、お二人についていけばよかった。休養に近い観光が6割で、小学校と大学を一つずつ訪問し、お話を聞き、授業参観をすることが2割、三人での語り合いが2割というスケジュールだった。

11月に入れば、普通は寒さで大変だそうだが、今年は暖かく紅葉もまだ残っていた。雪の中を歩くことも大雪山に登るロープウェー駅近くだけで、ラッキーだった。旭岳・十勝岳・美瑛岳などの雪をかぶった山々が美しかった。

噴煙を上げ雪に覆われた十勝岳



訪問地の中心は旭川と美瑛だ。撮影した景観写真を今回だけでなく、何回かにわたって紹介しよう。この季節は、観光客が少ないうえに、コロナのためにさらに少なく、ゆったりした旅でよかった。

右写真は、大雪山の樹氷の赤ちゃん

美瑛あたりの景観は、外国と比して語られるようだが、私は、カナダ、とくにプリンスエドワードアイランドのイメージを思い起こさせるものだった。畑や山がつくるいくつかの色のコントラストはいい。

北海道には、美しい自然景観と、寂しさが伴う旧産炭地、垢抜けし大都市化する札幌・旭川のなどの都市景観、そして農地が見せる景観などが併在している。

アイヌの博物館も楽しかったが、改めて苦難の歴史を深く感じさせるものだった。

そんな空気と景観の中を軽やかに味わう旅だった。



2021年11月12日

## 北海道の旅2 旅スタイルと人生発見

今回の旅は、年齢が離れているが、多様で豊かな人生をつくってきた三人のものだったので、人生発見が多いものだった。ペンションのオーナーの物語、小学校の教師や子どもたちの多様な物語、そして北海道という土地のもつ多様で豊かな物語を発見する旅でもあった。

タブレットを活用する小学校の授業もみたが、教師たちの工夫で、一人一台のタブレットに振り回されることなく、タブレットをうまく活用して、子どもたち相互の討論・共同作業を上手くしていたのが印象的だった。

旅する3人の語り合い、聴き合いは、人生旅を含んでいて面白かった。ホテルなどで出会う旅行者には、結構高齢者が多い。この時期だけに、団体ではなく少人数が多い。個性的な旅が多いのだろう。

「ケチな」私からすると、ぜいたくに感じる楽しみ方で、そんな経験も面白い。豊かなグルメ体験に基づく朝食バイキングの選び方の違いなども、発見が多い。スープカレーなど初体験も多いが、私の料理レシピに加えたくなった。

左写真は、白樺並木(美瑛)



てきた。

超ゆったりしたペースは、私にはありがたかった。同行者が色々な機会で見聞かしてくださって、「老」を味わえる旅になった。

右写真は、旭川常盤公園

左写真は、川村カ子トアイヌ記念館（旭川）

2020年09月30日

## 岐阜訪問

101歳になる母親が、「ボケないうちに会いたい」と繰り返し電話してきた。といっても、通訳系の義兄を間に挟んでの電話だが。新型コロナで気になる時期だが、人の移動が激しくなる10月の前に、ということで、28～29日と岐阜の実家訪問をした。



強気というか、勝気というかは難しいが、体力には定評があるので、日常生活の多くは自分でやる生活が続いている。会話は、どうしても義兄と私の間ですすむが、時々、本人が口を挟める。眼は老眼にならず、活字を読める。耳は相当に遠いが、補聴器でなんとか聞けるようだ。歩行器を使って歩くが、外出はほとんどしていないという。

特に病気はなく、胃腸薬と、ふらつき防止の薬を飲んでいる。私より軽い薬ばかりだ。

食事などの世話しているのは義兄だ。義兄はとても元気で、詩吟や卓球の趣味に加えて、庭畑作業、清掃など、いろいろな仕事もしている。



しばらくはこの状態が続けられそうな感じだ。  
 本家の後継者夫婦とも話ができてよかった。私の従姉妹になるが、かれらの母親は高齢者施設に入ることになったが、その顛末も聞いてきた。親戚などの消息も知ることができた。

時間の合間に博物館なども訪問した。前ページの写真の岐阜県歴史資料館は、はじめてその存在を知った。公文書館の機能をしているとのこと。洪水対処や、廃藩置県の様子を示す展示などがあった。職員の方と、話ができてよかった。岐阜市歴史博物館の方は、大河ドラマ中心の展示だったが、朝鮮通信

使が江戸に行く途中、美濃の大きな川に舟橋(舟を連ねて橋を造る)が作られたことの展示が印象的だった。

岐阜は、それほど変化していないが、郊外まで住宅が増えたことが印象的だった。

上写真は笠松駅(私が中学時代電車通学した時の乗換駅)、右写真は、木曽川。私の実家は木曽川と長良川・境川に挟まれた輪中地帯。



2020年03月23日

## 新型コロナウイルスのなか大阪旅

南城では、学校再開から一週間以上たち、体育館も再開され、卓球練習も始まった。このあたりで目に付く変化というと、海外旅行客の激減だろう。

そんななか、迷いはしたが、大阪旅をしてきて、23日帰る。研究会のための旅だったが、その内容は、すごく深いものだったので、改めて書くことになる







う。

ここでは旅印象記だ。

1) 飛行機では、観光客はゼロに近い。ビジネス客も少ない。季節柄か、家族旅が多い。年度末の移動や、家族旅行のためか。3連休なので、普通だったら超満員だろうが、それでも結構多かった。

2) 心齋橋のホテルにとまったが、付近は、私の目で見ると、結構にぎわっているが、現地の人たちの目では、すごく少ないようだ。関西空港往復の電車やバスも、定員の10分の1ぐらいだ。

3) すごくゆとりのある日程の切符をツアーリストにとってもらい、空いた時間は、すべて読書。例外は大阪城めぐり。

桜(写真)は数本が咲いていた。雪柳(写真)が美しかった。公園で100人を超す人々が高級カメラを持って待ち構えている。聞いてみると、「やつがしら」の撮影だという。驚くしかなかった。

4) 空いた時間に喫茶店に入る。1970年代型の喫茶店だ。客が多いが、そのころの喫茶店文化を楽しんだと思われる人がほとんど。老夫妻が朝食をとっていたのが、印象的だった。

2020年02月08日

## 久しぶりの東京旅

4日～6日と早朝から深夜までのハードスケジュールで東京に行ってきた。南城市『こどものまち』宣言策定のための視察だ。市役所の方々についていく旅だった。その中身は、別の連載で紹介することになる。

ここでは、東京・旅の印象話。前回東京に行ったのがいつか思い出せない。10年ぐらい前だろうか。

那覇空港は、オフ・シーズンの平日早朝にもかかわらず、人がいっぱい。8時前に、10便以上が飛び立つ。以前では考えられない。観光客ではなく、ビジネス客が多い。飛行機も満席。

私たち一行は、南城市役所職員が中心。視察先は、三鷹市・町田市・世田谷区の子どもにかかわる役所部署および公的施設で、対応も行政職員の方々や施設職員。だから、やり取りの多くは、行政機関間のスタイルが中心で、私にとっては初体験。と同時に、子どもに関わる現場の方々との出会いは、とても新鮮だ。

当然のことながら、どこでも私よりはるかに若い方々との出会い。皆さんの元気よさはすごい。子どもにかかわる現場職員は「さすが」という感じだ。私は、ついていくのに精いっぱい。それにしても、沢山の出会いと情報が溢れて、どう整理しようかと困るほどの量だ。時間をかけて吸収していこうと思う。

晴れ続きだが、やはり寒いところだ。かつて住んでいたところの近くにもいったが、変わらない所、変わった所が半々という印象。

この出張で、2月5日の結婚記念日に合わせて毎年でかける洋蘭博覧会見学を今年はやめにした。2年後は満50年、つまり金婚式を迎える私たち。企画を思案中だ。

今週のテニポン、卓球の練習もお休みした。その代わり旅の中でよく歩いた。朝ウォーキングもした。東京の空気がかつてと比べてきれいになっていてよかった。

2018年11月27日

## 紅葉 姫路城好古園、足立美術館、神庭の滝、六甲・有馬温泉



夫婦で、ツーリスト主催の旅に行ってきた。大阪空港からバス旅だ。

六甲→神庭の滝→蒜山高原→大山→出雲大社→足立美術館→湯郷→姫路城、という行程。

ちょうど紅葉の見ごろと重なってラッキーだった。いくつか写真を並べよう。

順に、姫路城好古園、足立美術館、次ページは、神庭の滝、六甲・有馬温泉

紅葉を見るのは、何年ぶりか。15年ぐ

らい？





2018年11月29日

## 旅の印象記 雪の大山 ホテル 神庭の滝 猿 出雲大社 姫路城

### 雪の大山

今回の旅は、二人とも時間にゆとりが出てきた時に、新聞広告のツアーに、行ったことがなく一度は見たいというところが含まれていたもので、出かけたというわけ。紅葉見学というわけではなく、たまたま季節が重なったということだ。当初予定は11月中旬だったが、そのコースは、キャンセルが大量に出て、コースそのものが私達だけになって取りやめになり、ツアーリストの要請で日程を移ったのだ。

いつもなら、ガイドブックなどで「予習」するのだが、今回は何もせずに出かけた。出かけてみると、想定外だった紅葉の美しさに喜ぶなど、いろいろと楽しんだ。ならべてみよう。



・久々の10度以下の寒さがこたえた。大山では雪も見た。

・PM2.5が少なくて幸いだっ

た。  
・ホテルは、シティホテル、観光ホテル、昔ながらの旅館風ホテル、といろいろだ。料理が多すぎて大変だ。それにしても、ホテルは朝夕ともにバイキング式だ。高級食材もあって驚いたが、おそらくバイキング方式だから採算が取れるのだろう。ベルトコンベア大量消費方式といった印象。昔ながらの旅館は、実は50年近く前の全生研大会に初参加した



時に利用したところ。以前と変わらないスタイルでホッとした気持ちになる。和室スタイルもよかった。私も昔風になったのかな。露天風呂もよかった。仲居さんがいるのもなつかしい感じになった。近くに住む40代50代女性が通勤でやっているとのこと。近くに住んでおられるので、いろいろと会話ができてよい。

・神庭の滝では、大阪大学が餌付けをしている野生猿数十匹が登場。滝・紅葉・猿と、いろいろと楽しんだ。

- ・スケジュールがゆったりしていて、どんどん見て回るといって感じでなくてよかった。
- ・結果的に、初めて見るところがほとんどだった。
- ・足立美術館は、お金をいっぱいかけて整然とした巨大な庭園。好古園は、江戸期の士族屋敷



の庭園を合わせたようなもので、歴史がありそう。私の好みは好古園。



・出雲大社、姫路城は初訪問だが、マスコミなどでよく登場するので、情報過多になっており、逆に新鮮味が弱くなった。それにしても、一度は見ておきたい所なので、よかった。



2018年12月01日

## いろいろなグループとユンタク 旅は道連れ

今回の旅は、34名の団体ツアーだった。飛行機以外はすべて同じ観光バスで、宿泊も同じ。といっても、初対面の人ばかり。恵美子のかつての卒業生が一人おられた。

そのグループの種類は多様。会社の旅行で、全社員が参加したグループ。幼稚園・小学生の同級生グループで、現在60歳代後半のグループ。保育関係の仲間のグループ。親子。夫婦3組。

個人旅の人はおられなかった。私達が最高齢だった。

旅は道連れというが、私は、こんな旅の時、せっかくだからいろいろとユンタクする。実に多様な人生模様が浮かんで、興味深い。

話していくと、どこかでつながっている。初対面でも、共通に知っている人がいるのが普通だ。沖縄は狭いし、人のつながりが豊かであることを実感する。

ユンタクは、食事の際、観光地を歩く際、待ち時間などとなにげなく進む。ユンタクのなかで、多様な人生があることを発見していく。これが楽しいのだ。

会社全員での旅行は、まったくもって楽しそうだ。異世代のユンタクが弾んでいる。私が全く知らない業種なので、仕事のことを聞くだけで発見ばかりだ。

幼児期からの仲間が、60年経て男女半々でいっしょに旅行などとは、驚きの楽しさだ。幼児期の呼び方で、60代になっても呼び合っておられる。楽しそうなので、私もつられて、その名を呼んで入り込んでしまった。話しながら、知り合いの知り合いであることが判明してくる。

保育仲間の方たちとは長い時間、ユンタクした。旅の後も、つきあいが続くような雰囲気を感じる。

夫婦旅行はよく見かけるが、親子の二人旅は素敵な雰囲気だ。

全員の共通点は、沖縄から旅をしてきたということだが、それがまた楽しい雰囲気を作り出す。また、出かけたくなってしまう。訪問先で見聞することも楽しいが、旅仲間とのつきあいも楽しいものだ。

大神山神社（上写真）

大山寺（右写真）





左 足立美術館の庭園



右 姫路城の好古園

2018年09月01日

## 孫たちとの出会いの旅

8月半ばに滞在予定だった息子家族の計画は、搭乗便欠航のため中止になった。そこで、私達が出かけることにした。なにも予定がはいっていない8月末のことだ。

シルバー割引という空席があれば乗れるという制度を活用したから、乗れるかどうか、多少の心配はあるが、うまくいった。

鹿児島は口永良部島だけでなく、桜島も噴火中なので、少々心配した。というのは、5年ぐらい前に出かけた際、火山灰を浴びて、呼吸器官が不調になったことがあったからだ。長距離散歩をした際に、吸い込んだようだ。その時は、降っているわけではないが、地面に落ちているものが舞い上がったりしたからだろう。ここで生活している人にとっては、どうってことないのだろう。ということで、今回の外出中はマスクをつけた。おかげで、不調にはならなかった。

写真は、慈眼寺公園から見た桜島

孫たちは、1年ぶりの再会だが、みんな背がグッと伸び、思春期青年期らしくなっている。受験学習が大変なようで、学習に忙しくしていた。末っ子は、お絵かきが上手く、将来希望としてイラストレーターも候補にあげているようだ。

すっかり大きくなって、遊んであげる必要はほとんどなく、彼らが私達を遊んであげるような感じで



もあった。息子夫婦も仕事で忙しい平日だったので、私たち自身であちこち散策した。

それでも、夜は長くユンタクした。ユンタクが楽しみになる年頃になってきた。中年家族の物語も面白い。お嫁さんが新しく学童クラブ指導員になったので、それをめぐる話も興味深かった。

最後の日、慈眼寺公園散策をした。結構広い自然の公園で、長距離散策になった。写真は、その時撮影したものだ。

帰りも、シルバー割引で無事搭乗できた。

2日間余りコンピュータや活字から離れた生活で、リラックスし、旅の疲れなしに帰宅できた。帰ってすぐに卓球の練習にかけた。

それにしても、鹿児島は火山灰のためか、家々を閉じきり、洗濯物も室内干しだった。沖縄にもどると、開放的な生活にもどり、ほっとする。

2018年04月23日

## 出会いが多い久々の旅1 25年ぶりの卒業生 実家訪問 赤池の前の家訪問

19日から三泊四日の旅をした。本州へ行くのは昨年4月の父の法事以来だ。いくつかの出会いを予定していたが、時間は決めずに、流れの中につくる旅だ。私たちの年齢になると、そんな流れがふさわしい。昼間の時間も、半分は休憩時間にした。そんなゆったりした旅でも、帰ってみるとかなり疲れている。

心配だったのは、PM2.5が多かったことだが、外出時は常時マスクをしたので、なんとかしのげた。天気はずっと晴れで、沖縄の現在の気温と変わらない暖かさに恵まれた。同じホテルに連泊して、そこから出かけるということにしたので、荷物をもって移動できる。老人バージョンの旅だ。

出会いの最初は、25年ほど前の卒業生と、だ。一人の卒業生のエイプリルフル情報にだまされて（だまされたふりをして）、かれの「結婚祝い」パーティーだ。みんな年相応に元気だ。若者バージョンから、味わいを感じさせるバージョンに移っている。私から見れば、若々しく輝き、つやを感じさせる。苦勞をしている分だけ、魅力的だ。

私の授業で出会った後、ティーチング・アシスタントとして奮闘してくれたので、私の授業づくりの共同展開者たちだ。「大学の授業を変える16章」時代のことだ。不思議なことに、みんな教職関連の仕事に就いている。学生・生徒とともに歩む授業を展開する真っ最中のようだ。

次は、岐阜の実家訪問だ。母も99歳になったが、相変わらず元気だ。昔同様の考え方で、まだ10時過ぎなのに昼ご飯を食べると強要するのには辟易したが。書道に奮闘しており、一茶の「雀の子」の掛け軸をいただいた。義兄も変わらず元気だ。詩吟と卓球に奮闘している。家の庭木も美しく手入れされている。ハナミズキが美しく咲き誇っていた。

現在の沖縄の家に住む前の家、名古屋郊外の赤池にも赴いた。住んでいる身内が転居することになって、家の管理が難しくなったので、不動産屋を通して売買することになった。最後の見納めもあって、赴いた。区画整理作業が進行して、森や畑の多い地域が様変わりだ。巨大スーパーができています。名古屋の中心に出かける

には便利なところなので、ますます変貌しそうだ。

それでも、住宅はしっかりとしており、かつて私が手入れしていた庭木も美しく育っている。写真は、入り口から、門に至る階段周辺の木々。つつじが咲き誇っている。今年は、暖かいためか早い開花だ。



2018年04月26日

## 出会いが多い久々の旅2 中京大学・立命館大学訪問 保育園訪問



が、移転した大学が目立つ。そんななか、中京大学周辺には、それほどの変化は感じられなかった。

10年ぶりほどだろうか、以前の勤務先の中京大学の八事学舎（写真）を訪問した。現在勤務中の知人と久しぶりの出会いをしたからだ。私の勤務中もそうだったが、次々に新学部が生まれている。私がいた頃にはない学部、編成替えをした学部が多そうだ。

八事学舎には、以前からあった建物だけでなく、新たな建物もある。時流に敏感に反応しながら進む経営動向が続いているようだ。そのなかで、心配事が増えていると知人は語っている。中京大学だけでなく、他の大学も変化が激しい

翌日、所用があって、立命館大学の琵琶湖草津キャンパスを初めて訪問した。広大な敷地にたくさんの建物が



並ぶ。建物には、すべてカタカナ名がついている。○○学部▽▽学部という名前ではない建物名だ。英語名をカタカナ表記にしてあるので、何の建物なのか理解するのが難しい。そのため、所用を果たす場所を見つけるのに、何人もの方のお手数をわずらわせてしまった。

駅から直行する臨時バスが頻繁に運行している。土曜日なのに、たくさんの学生たちがいた。学内食堂も満席に近い。これが、生協食堂であることを理解するのに時間がかかった。

すべてに斬新なありようで、私どもは大学旧人類なのかと思わせられてしまう。



帰りは、名古屋まで在来線を、三つ乗り継いで戻った。最近、はやりの各駅停車の旅だ。思ったほど、時間はかからなかった。窓の外には、新緑の季節の美しい緑が映えていた。

最終日は、前日に電話連絡がついた、友人が勤務する保育園を訪問する。日曜保育とのことだった。近隣各地の保育園に通う子どもたちで、親が日曜勤務をもつ場合に、平日に通う保育園ではない、この保育園の通うということだ。自営業の親が多いとのことだ。それでも子どもたち相互の関係がしっかりできていて、いい雰囲気ができていた。

この保育園は、高齢者施設を含めて、多様な機能をもつ総合的福祉施設として展開している。友人は、そのなかの子育て支援センター部門の担当をしている。区役所と連携して、子育ての多様なニーズに対応する活動をしているのだ。

こうした活動を展開する福祉施設をうらやましく感じる。

ゆったりした三泊四日旅だったが、結構歩いた。合計で34000歩になっていた。恵美子もずっと一緒だが、歩幅を考えると、彼女の歩数はもっと多いはず。よくぞ歩いたと思う。

大都市では、全体的に歩調が速いので、それにつられてくる。地下鉄車内を含めて、どこでもスマホをしている人が、常時半数以上いるという世界だ。人々の服装が暗色系の多い地味目なもの、沖縄とは異なる。ホテルのフロントが簡素化されているのも印象的。限りなくゼロに近い会話で進行するのも特徴だ。話し好きの私は、なぜか職員に話しかけてしまうのだが。ここも、結構外国人観光者が多い。いま多くの所がそんな感じになっているようだ。

# 旅論・観光論

## (2017～2018年)

2018年07月26日

## 旅に出かける欲求が低下

私は、10～15年前までは、たくさん旅をした。月一回以上だった。海外にも年一回近くでかけたし、国内は月一回のペースだった。だから、過剰に旅をしたといえるかもしれない。国内でいうと、全都道府県を訪問した。

ということで、行きたい所が少なくなった。行きたい欲求と、面倒だなという気持ちとを秤（はかり）にかけると、面倒気分がまさることが多くなった。行きたい欲求を生み出すものは、出かけて見たいことやりたいこと会いたい人というものだろう。アイルランドやアメリカ在住の友達からの誘いがあるし、見たいものはある。国内でいうと、出雲・津和野あたりや秋田あたりには、未訪問の行きたいところがある。それでも、面倒くささを追い越すほどの欲求まで高まっていないのが実情だ。

10～15年前までの旅は、業務としての旅が圧倒的に多かった。大学を含む諸学校訪問、研究会参加、講演ワークショップなどだ。業務としての旅だが、時間の隙間ができると、近くのどこかを見に行くこともあった。招待先の方が案内して下さることも多かった。

だから、いわゆる観光が主目的の旅行はほとんどなかった。旅には休養・リラックスが目的になることがあるが、私たちが今住んでいる場所が、100%以上、それにふさわしい場所なので、わざわざ旅までして気分転換を求める気にはならない。

そのため、最近の旅は、個人的所用があつてのものが多し。一番多いのは冠婚葬祭だ。業務での旅は限りなく減った。

体力のこともある。以前なら、旅の有効時間を徹底的に活用した。今は空き時間はホテルで寝転んでいることが多くなった。

沖縄県内では、歩くことには興味がある。11月～5月の涼しい季節に限定されるが。その点では、3年前に南城市内を30～40回かけて歩いたのが、楽しい体験だった。今も機会があれば、自動車などで出かけどこかに車をとめて歩くことはしてみたいと思う。沖縄県内でもかけた所が多いので、未訪問箇所でも歩くのにはいい場所を探すのは、なかなか難しい。県内有人島をすべて訪問したという人もいるが、私はそこまでの気持ちは生まれていない。

退職後の時間のゆとりを、旅の時間にする人は多いが。私は旅への欲求が低下してきている。強力な誘いがないと立ち上がれないが、その誘い人は第一に恵美子だ。恵美子について旅になることがますます増えそうだ。

こう書いたら、アイルランド旅行の新聞広告が出た。旅行社に電話すると、参加できそうな日程は、すでに満席だとのことだ。ともかく資料を送ってもらうことにした。

2018年06月30日

## 公共交通機関網の大胆な再編を 自動車依存ができなくなる時

6月24日記事「自動車依存ができなくなる時」につながる話だ。現在60代半ばから70代初めの団塊層は、

数年後には、交通弱者になり始める。この世代の大半は、現在自家用車使用に依存しているが、数年後には依存できなくなる人が増え始めるだろう。沖縄人口の一割に近い人々だ。それを契機に今から、交通手段・交通機関のありようを検討しておきたい。

自分で運転できなくなった方々の交通手段は、徒歩、電動車いす、家族や知人の車、バスなどとなろう。

観光者訪問者も、レンタカーへの依存率が高まるばかりだが、それは公共交通機関の弱さに比例しているといえよう。しかし、観光者の高齢化がゆっくりと進行しそうで、レンタカー依存も変わっていきそうだ。

個人として対策を考えなくてはならないが、と同時に、自治体やバス会社にも考えてほしいことだ。

バスには、自治体が運営するものがあるが、人気が結構あって、希望通りに行かない例が増え始めているようだ。しかも自治体の区域内に限られる。他に各種送迎バスがあるが、それは行き先が限定されている。そこで、路線バス利用となる。

那覇往復となると、以前ほどではないが、那覇市内に入ると渋滞に悩まされる。渋滞がなくても、市内でスピードダウンとなる。私が住む玉城からを例にとると、仲井真から那覇市内に入るが、そこまでは25分くらいで行くが、そこからバスセンターまで30分かかる。直通のバス路線が通っていないところには、バスを乗り換えるか、タクシーなどを活用するしかない。玉城から那覇中心部までは、タクシーでは4000円かかる。中北部にいくとすると、公共交通機関を使うことは、最初から考えにいけないのが現実だ。たとえば、玉城から琉球大学にバスで行くなら、2~3時間はかかるだろう。同じ南部でも、糸満には、1~3時間かかりそうだ。直通路線がないからだ。自動車なら30分だ。

私たちの現実問題としては、同じ那覇でありながら、那覇空港への交通手段をどうするかが大きい。バスとモノレール利用だと2時間近く必要だからだ。

こうしたことの背景には、路線バスのほとんどの路線が那覇中心部との往復を基本に設定されていることがある。もう何十年も続くことだ。最近になって、おもろまちなどを起点にする例もでてきた。モノレールと結び合っ、バスを有効活用する方向は有用だろう。モノレール以外には、空港自動車道や那覇環状道路に路線バスを通すことが考えられる。玉城からだと、1時間余りかかる那覇中心部に対して、空港自動車道に路線バスが走るとすると、空港までは30分余りで行けるだろう。工事中の南部東道路が開通すると、さらに時間短縮されるだろう。

公共交通機関を環状に走らせることはもっと検討されてよいだろう。要求の高い鉄軌道にもそうした考えが必要だ。那覇中心部一点に集中させる発想は「時代遅れ」のように思われる。

道路が整備されているが、車道がきちんとしているのと対照的に、電動車いすなどがうまくとおれない歩道が多い。高齢者や障がい者が移動しやすい交通網が必要なのだ。そうでないと、ただでさえ閉じこもり気味な人を、さらに閉じ込めることになってしまう。

従来を発想を超えて大胆な交通網を作り上げることが求められている。そのことで、バス利用者を増やすこともできよう。

2018年06月24日

自動車依存ができなくなる時

私のお出かけのほとんどは自家用車を使うものだ。20分ぐらいでいけるなら、徒歩だが。他に、まれにバスがあるが、年に1～2回だ。タクシーも年に1～2回、知人友人の車で連れていってもらうのも、年に1～2回。

だから、徒歩以外では、自家用車利用が90%以上だ。一か月400～500キロほどの運転。超省エネ運転で、1リットル当たり30キロ余りの平均燃費だから、2か月に一回のガソリン満タンのサイクルだ。

お出かけ先を並べてみよう。

まず週一回以上あるもの

・授業・会議・ワークショップ ・買い物 ・卓球練習・試合

合計すると、週に4回ほど。

2か月に1回～1か月2回程度のもの

・集まり・行事・友人親戚との出会い ・病院・歯医者・補聴器店 ・郵便局。役所  
・遊び・お食事・温泉 ・空港（旅行と送迎）

合計すると、週に2回ほど

これらのほぼすべてが、徒歩で行くとすると、30分以上かかるので、実際は自家用車使用だ。

その自家用車利用ができなくなる時が近づいている。加齢に伴うものだ。加齢にともない、反応が鈍くなってきている。スロー（よーんなー）運転で安全を確保しているが。今でも山原まで出かけるとなれば、途中休憩が必要だ。名護で卓球試合の際には、仲間の車に便乗することにした。

自動車使用の今後の頻度を予測してみた。

現在 週に5～6回 75歳ごろ 週に4～5回 80歳ごろ 週に3～4回 85歳ごろ 週に2～3回

恵美子は、私より自動車使用回数が上回っている。二人で一緒に出掛けることも多い。80歳を過ぎたら、各自が一台持つのではなく、二人で一台で間に合いそうだ。そして、80代には、運転困難となりそうだ。近隣には90代になっても運転している人がいるが、私にはその自信はない。

だから、自家用車が使えなくなったらどうするか、考え始めるころになってきた。もっとも、今はイメージトレーニングの類だが。

おでかけを減らすのも一案だが、減らしたくはない。代替りの交通手段を探し作ることを中心にした。都市地域で、公共交通網が豊かな地域であれば、話が変わるが、私の近くでは、バスなどで行ける場所は限られている。先に書いたお出かけ場所で、バスで行ける場所はほぼないのが実情だ。だから、我が家の地域を、国機関は、「買い物難民」地域と記している。

2017年12月08日

## 訪問者と住民との交流協同 観光を考える

ここ数年、観光について考える機会が多い。私の周りでは、体験滞在型観光とか、リピーター型観光、持続型観光、観光客と住民とがともに、とかがよく話題になる。

それらは、観光客と観光業従事者という二極ではなく、訪問者（観光客）と地元住民とが中心アクターであり、その両者の交流協同を中心にし、両者間の流れをコーディネート、ないしプロモートする役割、つまりは

ディレクターとしての観光業従事者の役割があるという捉え方に通じる。

従来は、観光客と観光業従事者との関係が中心で、サービスの受け手と提供者という関係だった。それに代わって、訪問者（観光客）と地元住民との双方向型の交流協同を演出する観光業従事者という方向へと転換するということである。だから、観光計画も、観光客にどんなサービスを提供するかというよりも、訪問者（観光客）と地元住民との双方向型の交流協同をいかにつくりだすかという性格へと移りつつある。

無論、魅力的な自然とかアミューズメント施設を提供して観光者を楽しませるというスタイルの観光もある。その場合、観光地周辺の住民は、観光業従事者以外は「カヤの外」になる。そうした観光地は多いが、持続型観光を追求するなら、早晚、これまで述べてきた方向に変化していく必要がある。そうしないと、賞味期限切れに近づくことになる。

だが、地元住民→訪問者という流れがそこそこ見られるとしても、訪問者→地元住民という流れが未熟であるところが多い。それはそうした発想が弱くて未経験だからだ。そして、観光業従事者においても、その流れでの発想は弱い。その点では、観光業従事者のなかに、住民との関係でいうと、すでにある雇用問題、土産物や食品など物流といった視点のレベルを大きく超えていく必要があるだろう。

一つ例を出そう。観光効果として「癒し」への関心が高まっているが、それは自然から得るものが一つの軸になる。それに、最近では、医療サービスが加わってきている。さらに加えて、住民の生活習慣をベースにしたものの検討があってよいだろう。住民生活が作りだすオーラのようなものがあるだろう。それには景観もある。そうした観光魅力の発見創造が話題になっている。街並み保存などもその例だろう。また、文化遺産や自然には、地元住民が育み引き継いできた物語が必ず含まれている。訪問者がそれを聴くことは、観光の質を大きく深化させる。

それらの場合、地元住民は、地元の価値に気付かず訪問者から指摘を受けてはじめてスタートすることもある。そうしたことには、双方向型交流協同が不可欠だ。あるいは、地元住民自身が、観光者として外に出かけて気付くこともある。そうした類も観光事業の重要な一つであるが見落とされがちだ。安易にアミューズメント施設創設に関心が向けられて、地元の宝（観光者にとってだけでなく地元住民にとっても）に気付かないのだ。

その点では、地元住民一般の人が、外の世界からの訪問者とじかに出会い、協同する場の設定が重要だろう。そうしたことを推進する地元住民としては、外に出かけての観光体験豊富な人、民泊を受け入れるホスト家族たち、あるいは、訪問者と地元住民とが出会い交流する場への参加者たちがいる。姉妹都市交流経験者、国際交流企画参加者などもそうだろう。

これらは観光客受け入れの量よりは、質に注目する時期に移っていることとつながる。近年、各地の観光地で地元住民が観光に反発する事態を招いていることを考える時、これらは一層重要なこととなる。それは観光を産業的視点にとどまらず、訪問者と地元住民を合わせて、暮らし・文化と生き方と結びつけて考えるということでもある。さらにいうと、多文化協同、友好・平和につながっていく。沖縄の観光の大きな柱として、戦争と平和があることは重要なことだ。

2017年11月05日

香港と沖縄 観光

10月30日3時からの南城市観光セミナー「香港の可能性を考える」を聴いてきた。話題提供者は、沖縄県香港事務所所長の税所清隆さん、香港経済新聞編集長の木邨千鶴さん、南城市観光商工課の喜瀬斗志也さん、アンカーリングジャパンの中村圭一郎さん。

聴きながら、注目した点を並べていこう。

### 1) 香港からの沖縄観光者の特徴

30代~40代前半の女性 消費額が高く、「富裕層」に近いイメージ 平均5泊と比較的長期滞在  
FIT (海外個人旅行) がほとんど のんびり旅や一人旅もある 訪日リピート率が高い 一部に修学旅行生やスポーツ合宿などもある

来沖が沖縄らしさを求めるとは限らず、日本を求めてのことも多い。

沖縄の自然に魅力を感じている

免許を持っているが、車を持っていないので、沖縄で運転してみたいという例もある

香港では子どもが家の外に出て遊べないので、沖縄にきて、公園で遊ばせる例がある。沖縄の公園が香港家族でいっぱいになることがある。

公共交通機関が整備されている香港からの人は、公共交通機関を利用しようとする人が多い。

### 2) 香港人の特徴

自由 多文化的 自主的 新しいもの好き 金銭感覚鋭い 柔軟性 ポジティブ 素直 群衆心理 プライド高い 長寿世界一

日本人の海外旅行は計画性をもってきちんと準備する傾向が強いのに対して、香港人は、発想力豊かで、ウェブサイト情報をよく活用する

### 3) 沖縄への観光者数は、台湾、韓国、大陸中国、香港の順である。

以下は、私なりに考えた点

1) 多文化は、欧米諸国やオーストラリアなどでは、よく話題になるが、アジアではどうなのか。アジアも長い歴史にわたって多文化地域なのだが、欧米などにおける多文化とは、ありかたが異なるようだ。その点で、沖縄も香港もそのことを考える重要な場である。そして、観光を通して、多文化問題に切り込んでいくことは、重要なアプローチになろう。

2) 香港の観光資源は、100年以上にわたる長いものが少ないが、この100年のドラマ、そして現在・将来と、興味深い点が多い。

3) 外国人から見た沖縄と日本。両者が区別されている時もあるが、日本のなかの沖縄として見て、日本とは異なる沖縄らしさを求めるとは限らない。

4) 議論がメディアを活用した若い世代の観光・交流に焦点が当たりすぎている。

長寿世界一の香港からの人生後半期の観光者が見えにくい。沖縄の地元の人生後半期の方々との交流などを視野に入れたものがあっていい。

5) 観光が当面の「産業」としての活性化に焦点が当てられがちだが、10年20年の長期の視野にたつて、香港を含むアジアとの交流の視点で考えていく必要がある。

その際に、「産業」的視点だけでなく、文化を軸にする人間交流として構想していく必要がある。

6) 多文化的視野も含めて、沖縄がアジア諸地域の交流の場となるような観光構想が必要だろう。

7) 比較がよくなされる台湾は沖縄と長いつきあいだし、なんらかのつながりを持つ人も多い。これに対して、香港とは新しい出会いと感じる人が多い。香港との関係で、どうしたものを築いていくのかは、今後の課題と

いえそうだ。

2017年03月20日

## 個人ツアー型 私の観光体験1 体験的観光論1

ニュージーランド旅から戻って、観光についてこれまで考えてきた事を書きつらねてみる気持ちになった。私自身の観光体験がベースにあるが、南城市という観光が盛んな地に住んできたことも、考える素材をたくさん与えてくれた。

まずは、私の観光体験から語ろう。私は、日本国内の全都道府県に旅したことがある。海外は、10か国余りだ。そうした旅のなかで、今回のニュージーランド旅のような、観光を主目的にした団体パック旅行は例外的なものだ。小中高校時代の修学旅行を除くと、記憶にあるのは、2～3年前の伊平屋・伊是名旅だけだ。5～6年前の近隣の方々の台湾観光旅行もそれに近いが、近隣の方々の知人つながりで企画されたもので、団体パック旅行度50%というところだ。

海外にしろ国内にしろ、ほとんどが個人旅行だ。仕事だけの旅が圧倒的に多いが、仕事中心の旅のついでに観光したこともかなりある。講演・ワークショップの講師に呼ばれた時などは、空港・駅からの送迎ついでに観光、あるいは途中でおろしてもらって、自分なりの旅に切り替えることもあった。あるいは、学会などに参加のついでもある。また、知人・友人・近親者などの訪問ということでの旅も多い。知り合いなしのところ訪問するのは、今回のニュージーランド旅を含めて数回しかないだろう。

多忙の中での気分転換のため、大きな駅まで出かけ、駅で行き先を決める旅をしたこともある。到着駅から、ぶらぶら歩き、夕方になったので、出合った宿泊施設に泊まるということもした。

ということで、団体パック旅行のように、予めスケジュールが決められた旅は少ない。現地到着後に、行動スケジュールが決まることも多い。長期滞在の時には、その日ごとに宿泊先を出たところで、赴く先を決めるとか、歩いて行って気分次第で行く先が決まるとかの時も結構ある。ヘルシンキ滞在の時は、そんな日が続いた。朝9時ごろ滞在先を出て、前日は北方向に行ったので、今日は南方向に行こうと歩き出す。地図をもって、好きなところを1時間余り歩き、そこからは帰り道にしようと言った具合である。気に入った見学施設があれば、そこに入る。

人に会い交流することが観光ということも多い。知人・友人訪問であればそうなるが、知人友人が旅先に居ない時でも、出かけた自然・史跡で出会った初対面の人と語り合うことも多い。飲食店で隣り合った人や店主と語り合い、翌日の訪問先のヒントを得ることもある。

2015年に岡山で開かれた学会の際は、神戸空港を利用したが、帰途、新神戸駅近くの布引ハーブ園に立ち寄った。月曜日で人出が少なく、園内ガイドツアーはガイドを独り占めした。その際は、予め決められたコースによるというより、私の好みや質問に合わせて、ガイドしてもらった。ハーブ好きの私には最高だった。結果として、そこに3時間近く滞在し、飛行機搭乗時間まで目いっぱい楽しんだ。



2017年03月30日

## 軽装 歩く 滞在体験型観光 私の観光体験2 体験的観光論2

私の旅の持ち物は軽装が基本だ。90年代の共同研究での一週間もカナダ旅行では、大きなリュックにすべて入れて、搭乗の際に荷物預けをしないで旅をしていた。

靴は革靴だけどウォーキングシューズであるものにしてから、もう20年を超す。長距離歩いても疲れなからだ。余談だが、温泉に宿泊するときは、一日に2回以上入浴して、疲れを取ることが普通だった。

体験・滞在型観光ということが各地で広がっている。私のヘルシンキ旅は、2～3週間旅を二回したが、まさに滞在型だった。

私の国内旅では利用したことはないが、ウィークリーマンション、マンスリーマンションに泊まる旅が増えている。去年は友人が、南城市内のマンスリーマンションに一月滞在した。その間に、私が紹介した三線教室に通うということもあった。

なかにはセンカンドハウスを持つ人もいる。私たちのことでいうと、愛知在住のころの90年代末から那覇にマンションをもったので、家族のだれかが、そこに滞在していることが多かった。

従来の、ホテル型の旅以外のありようが増えている。南城市内では、ホテルはむしろ少数派だ。ペンション・民宿、修学旅行の民泊、そして最近激増している民家の空室提供などと多彩になっている。

私は旅先で歩くことが多い。私自身の健康のためもあるが、訪問先をよく知るうえで、歩いて回ることがとても有効だからだ。大学で開催される学会なら、大学構内を歩くことはいつもの癖だ。小中高校を訪問するときは、校区を歩くことが多い。校区の様子を知ることが、生徒たちの生活や文化を理解するうえで役立つからだ。訪問先の知人宅周辺を歩くことも多い。

歩くことの難点は、排気ガスやPM2.5を浴びやすい事だ。鹿児島では桜島の火山灰を、今回のニュージーランドでは氷河が削った土のほこりを浴びて、喉・気管支を痛めてしまうという苦難体験をしてしまった。

ということで、地図やガイドブックを手に入れて、旅行前の予習をすることはいつもやってきた。これがまた楽しい。海外旅行の場合は、ガイドブック以外にその地域の事情についての本を数冊読んでおくことが多かった。そして、現地到着後に、現地でしか買えないような地図を買うことも多い。とくに歩くことに適したものが良い。小学生のころからの地図マニアをずっと引きずっているわけだ。

その点では、今回のニュージーランド旅は、ガイドブック一冊しか目を通していないので、予習不足だ。でもそんな他人任せの旅もしてみようという気持ちになったのは、年齢のためだろうか。

2017年04月08日

## 観光と地元民 体験的観光論3

観光地化したのが比較的新しい地域では、地元住民に観光地化への対応にとまどいが出てくることもある。私の体験を書こう。

ここ1～2年、レンタカーでこのあたりを回るアジアからの観光客が目立つ。散歩をよくする私だが、この間3組ものかたに、道を聴かれた。タブレットを見せて、〇〇へはどういくのか、と聞かれたこともある。ストレートに英語で聞かれたこともある。いずれも、簡単な英語で道を教えてあげた。老人の私が英語を話すものだから、かえって相手が戸惑われたこともある。

でも、言葉上のことがあり、対応が難しい地元の人も多いだろう。海外からの観光客も困ることが多いだろう。近くで交通トラブルに巻き込まれた海外観光客を助けた地元の人が出て、後で手厚い御礼が送られてきた話も聞く。他方、交通事故を起こしたが、そのまま出国したので、地元の人を被害届を警察が受理しないということが報道されたりもした。

観光客が増えるということは、地元住民にとって、突然降ってわいたような気持ちになることもあるだろう。観光業に従事している人なら、多少の慣れはあるだろうが、そうでない人にとっては、どうしたらよいか戸惑うことがあるだろう。

その点では、観光産業や観光行政は、観光客向けの取り組みをするが、地元住民向けの取り組みが抜け落ちてしまうという注文が出てくる。「観光魅力を市町村の魅力にしているから、地元民の理解と協力をお願いしたい」といわれても、困ってしまう地元民もいるだろう。

また、観光スポットには、地元住民が長く信仰の対象にし、大切に維持管理してきたところが多いが、そこにかつての100倍、いや1万倍以上の人が訪問するものだから、地元の人にとまどいは大変なことになる。観光のための周辺整備は地元民にとってもいいのだが、整備によって大量の観光客が集まり、信仰の雰囲気をも損なう事がある。それどころか、祈る地元民を観光の眼差しで見ることには違和感をもってしまう。

他方、修学旅行の民泊などで、観光者と住民との交流などの体験を通して、よかったと語る地元民も多い。観光地化で、地元の知名度が高まってよかったという人もいる。さらに、観光の活性化で、雇用機会などが増え、生活の糧が得られて喜ぶ人も多い。

こうして、観光客と地元住民との関係の問題が大きく浮上する。こうした例は、観光機会が激増して以降、観光地化した地域でよく見られる光景だろう。私が訪問した海外の観光地でも、同じような例に出会うことが多い。

地元民と観光とのかかわりという、受け入れ側としての地元民についての話題がほとんどだ。しかし、観光に出かけるものとしての地元民をとらえることも必要だろう。それは個人の好みなどの条件によっても、どういう観光旅行を促進するか、ということも重要なことだ。地元民を送り出すという意味での観光だ。観光行政や観光業界にはそうした視点が不可欠だろう。

さらに、地元民と観光者との交流・提携・協同といったことが、もっと話題になってよいだろう。そのことによって、地元民が観光を自分自身のこととして捉えることが促進されるだろう。

この、問題は次回、もう少し述べるつもりだ。

2017年04月17日

## (続) 観光と地元民 体験的観光論 4

「地元の人知らないことを、観光客や訪問者の方が知っている」という話はよく耳にする。外からの人は、

その地のことをよく知ろうとするが、地元の人、生活とともに地元があるので、改めて聞かれるとよくは知らないということは、どこでもありそうだ。

また、地元の人が、仕事・学業・旅などで外に出た時に、地元の良さを発見するというのもよく聞く話だ。

ということで、観光は、観光客だけでなく、地元の人にとっても、地元発見の絶好の機会だともいえよう。その際に、外来者と地元民との会話・交流・共同作業が有益だ。観光客が地元各地を訪ねるエコミュージアムというのは、そういう性格をもっている。

だから、地元の宝を観光客に紹介する前に、地元民に紹介する取り組みが、とても有益なのだ。ガイド養成講座などは、そうした面を色濃く持っている。ガイド自身が、地元のことを感動的に学び発見することで、観光客への感動的なガイドができるというものだろう。

そして、地元発見の過程は、地元の地域起こしに直結する。

その点では、観光スポットを通しての観光客と地元民との結び合いということを大切にしたい。さらに、発見し合うだけでなく、観光客と地元民との交流・共同によって、新たなものをつくりだしていきたい。

そうしたことを可能にする一つの理由は、外来の観光客が、地元民が持っていない異なる視点を持つことにある。地元民にとって当たり前の日常的なことに、観光客は新鮮な驚きをもって向き合う。そのことを地元民が目撃することを通して、新たな目で地元を発見するのだ。

その意味では、観光者と地元民との関係を、客と受け入れ者との関係の域を越えて、共同発見創造者のレベルにまで持って生きたい。姉妹都市といった形での相互訪問などはそれらを促進するだろう。

さらに進むと、観光者と地元民という二分が不適當となり、双方が協同するレベルにまで達するだろう。

人々が、生育した地元でずっと暮らして生涯を終えるといったありようが激減している「移動の時代」である今日では、實際上長期に生活する地域が「ふるさと」「地元」になってきている。学校時代は、住み続けることになる新たな地での生活・仕事を準備する時期ともいえよう。

その点で、若年期における旅は、人生創造の準備にとって不可欠のものになっている。旅先の観光地に仕事・生活・人間関係を発見創造し、その地が「地元」になる例は珍しくない。そんな観光地を目指す動きが静かに増えているようだ。

2017年04月28日

## 大量消費・団体・パック型から安価・個人・フリープラン型への変化

### 観光の変化1 体験的観光論5

社会全体の観光旅行のありようが大きく変化しているようだ。1980年代90年代を境目にして、1970年代以前と2000年代以降というように、大きく分けることができるように思う。

その変化について、私の見聞体験をもとに、いくつかアトランダムに書いていこう。

1) かつての旅行は、その日のために貯めていたお金を支出するというイメージがあった。そして、団体旅行

をまずはイメージした。旅の過程で、団体メンバーの親睦を図ることが大きな目的となることが多かった。温泉に出かけ、入浴後の大宴会が旅のメインというイメージだ。社員旅行や、農閑期の農協主催の旅行が典型例だろう。1970年代の沖縄旅行でもよく見かけたものだ。

富士登山やお伊勢参りに代表される神社仏閣への団体旅行は、江戸時代から続く伝統行事だが、沖縄でも、東御廻りや今帰仁旅などの形として存在してきた。そうした信仰と直接結びついたものだけでなく、多様な旅が1960年代1970年代にかけて広く見られた。それらには、慰労のイメージがあり、元気回復して日常業務で頑張ろうというものだった。

旅行経費は、交通宿泊費の他に、宴会、物見遊山、土産物などに向けられるが、消費イメージが濃いものだった。一般の人にとって、遠出になる旅行は数年に一回程度のものであり、毎年出かける習慣を持つ人は増えてきてはいても、一般化してはいなかった。それでも、それ以前と比べれば、はるかに増えた。

その背景には、高度経済成長の下での大量消費習慣の広がりや定着があった。

こうした団体旅行には、大型バスが必需品だった。その大型バスが自家用車使用の旅、陸続きではない沖縄ではレンタカー使用の旅へと転換するのが、観光の変化の象徴的なものだろう。それは、団体型から個人型への変化を伴っていた。

高度経済成長期の旅は、「一億総中流」といわれる時代を反映して、ごく一般の人々のものとイメージされ、大量生産大量消費の時代にふさわしく、「贅沢する」といった感じの消費としてイメージであった。

高度経済成長、そして大量生産大量消費の時代は終わるが、旅が習慣化するなかで、大盤ふるまいの贅沢としての旅ではなく、そしてまた団体型ではなく、個人旅行として、かつ予め旅程が細かくパックされたものではなく、自分たちなりの旅行へと変化していく。パックではあっても、フリープラン型の個人旅行の一般化として登場してくる。

沖縄旅行についていうと、航空機代の安価化、航空機代とホテル代がパックになったものとしてあらわれる。さらに、航空機代だけでなく、安価な宿泊費を実現する多様な施設が準備されるようになる。そして、リピーター型が増え、贅沢な物見遊山的な旅イメージは減少していく。無論、庶民旅行とは異なる富裕層の旅行イメージがあるが、それにしても派手な旅行というよりは、富裕層なりの落ち着いた旅がイメージされている。

2017年05月08日

## 旅行目的の多様化 観光の変化2 体験的観光論6

以前なら、観光旅行先は、名所旧跡訪問など、おおよその見当はついた。沖縄旅行なら戦跡訪問がもっとも多かった。だが、ここ40年余りで多様化が進行し、とくにここ20年で実に多彩化している。並べてみよう。

○ 名所旧跡 神社仏閣 「京都に行ってきた」というと、それらが目に浮かぶ。桜・紅葉、川下りなども、かなり以前からある。さらに大学めぐり、祇園・西陣体験、座禅体験、漫画博物館、醸造元見学・・・、と多様化は進む。

沖縄来訪者にあっても、こうした傾向は、海洋博・水族館見学、戦跡・慰霊塔訪問、基地見学、グスク訪問、などと多様化は進行していく。

○ エンターテインメント かなり前からあるものとしては、祭り見学がある。今や観光客の数が地元民より

多い祭りもある。越中小原の「風の盆」などもそうだろう。

ここ30年ほどで激増したのは、レジャーランド・テーマパーク型だ。東京ディズニーランドが典型だろう。そういう施設づくりに狂奔し、しばしのブームが終わると閉鎖の憂き目にあい、残ったのは借金という例も多い。夕張が典型だろう。沖縄でもそうした動きが生まれることもある。

コンサートへの参加旅行もそうだろう。最近では、参加者の予約でいっぱいになり、受験生のホテル予約がとれないという問題まで発生している。

沖縄でも、エイサーショーやエイサー大会参加、那覇大綱引き、糸満ハーレー見学、民謡酒場、踊り見学などいろいろだ。さらにはイルカショーなどもその類かもしれない。

各地で催される○○音楽祭のような企画も注目されよう。

○ 湯治場など、保養目的の旅の歴史も長い。近年では、森林浴・海浜浴などもある。さらに、パワースポットなどといって、「癒し」を求める旅も多い。人生の迷い・疲れへの対処としての旅も目につく。「癒し」を求めての齊場御嶽や久高島などは、南城市観光の目玉ともなっている。

それらは、スピリチュアリティといわれる心のありよう、ロハスとかスローライフといった生活のありようの新しい転換への試みと結びつくこともある。

○ 結婚式（リゾ婚が代表）、家族の記念旅行（子どもの進学卒業記念、還暦祝いなど、戦跡地訪問にもそうした例がある）などプライベートな記念旅行も多い。以前なら新婚旅行が大きな比率を占めたが、今では、多様なカップル旅行へと形を変えていて、旅行者のかなりの比重を占めている。

○ 長い歴史をもつ登山やハイキングなど自然とのふれあいの旅も多い。そうしたものにターゲットをあてた旅番組が毎日のように放映されている。海をめぐるものも、海水浴だけでなく多彩化している。ダイビング、クルージング、鯨ウォッチ、カヌー、サーフィン、釣り・・・多様化は留まるところを知らない。沖縄観光の「主力商品」とさえなっている。

スポーツ目的の旅も多い。運動部のトレーニング合宿は日常的になっている。最近の沖縄では、プロの有力チームの冬季練習場としての注目度が高まっている。そして、練習見学で、ファンの旅行を誘発する効果も高い。有力チームの誘致合戦さえ見られる。

最近では、ニュージーランドの空手オリンピックチームの沖縄合宿計画が話題を呼んだ。

○ 体験型旅行も広がっている。三線・舞踊などの芸能体験は人気だ。収穫体験などの農業体験、陶芸やガラスなどの工芸品づくりなども人気を集めている。日常的には接する機会がないジャンルの体験に関心が集まっているようだ。とはいえ、趣味や職業で日常的に取り組んでいることが、他地域ではどうなっているのか、といういわば「研究交流・技術交流」的なものを求める例もなくはない。

体験型は、地元民との交流という形でも広がる。民泊などは、そうしたものを含むことが多い。

初体験がリピートや長期滞在を呼び込むきっかけになることも多い。

○ 近年注目されている一つは、買い物目的の旅である。大量物販店が観光客を集めている。「復帰」前後の沖縄では、本土価格の数分の一のスコッチウイスキーを買い込む本土旅行者が多かった。かつてのほどのうま味はないにしても、免税店を活用して土産や嗜好品を買う旅は今も残っている。身近に隣国があるヨーロッパでは、酒税が安い国への一日旅行で、大量の酒を買い込むことに会う。

変わり種としては、海外からの医療検査目的の旅が広がっている。

沖縄から観光旅行に出かける人にも、土産物や、旅先でしか手に入れることができないものを求めることが

観光の主目的の一つになっている例がある。行きは空の大きなスーツケースを一杯にして帰るなどもそうだ。

○ 社会的関心をもち、社会運動参加目的もある。平和学習が典型例だが、近年では反基地運動へのかかわりも増えている。

○ 研究調査としての旅行。中高生の平和学習目的の修学旅行などもその例だろうが、大学生や研究者ともなると、一層専門的な事項にターゲットをあてたものとなる。

大学生のゼミ旅行などは、かなりの量になるだろう。調査対象がある地域に長期滞在して研究する大学院生なども多い。

○ 研究者では研究調査や研究協議だけでなく、学会参加という形の旅も増えている。研究的なものに限らず、大小の規模を問わずコンベンションが増加している。沖縄でのMICEには、そこに焦点をあてるものもあるが、交易会・見本市といった商業目的が中心のようだ。

そのためもあるのか、リゾート型とは対照的なビジネス型ホテルが、観光客にも結構活用されている。

○ コンベンション参加のついでに付近を見て回る旅行も多い。そういう人のために、オプションツアーが用意されることが多い。なかには、研究と関係がある場所へのフィールドツアーなどもある。

北欧で、クルーズ船のなかで懇親を兼ねた会議を開くとか、クルーズ船を宴会場にするという「旅形式」を見たが、そうした多様なありようがアジア・日本・沖縄でも広がるのだろうか。

○ 若者対象にワーキングホリデーという形での長期の海外滞在型旅行をする例は多い。海外からくる例では、外国語教師をする例が多い。15年以上前の話だが、カナダのトロントで、日本での1~2年間の外国語教師を募集したところ、何百人という応募者があったということ、面接業務を担当する既経験者から聞いたことがある。

大学を卒業したらすぐに就職という日本の習慣とは異なって、欧米では卒業後しばらく長期海外旅行など世界探訪・人生経験を経たのちに、就職を考えることはよくある例だ。

2017年05月30日

## 日常型旅の登場 移動手段の多様化・軽便化 観光の変化3 体験的観光論7

旅の目的だけでなく、旅の形がどんどん多様化してきた。

### ・日常型旅の登場

これまでの旅の多くは、日常生活から離れて（日常を忘れて）、「命の洗濯」という感じで、非日常的な性格を色濃く帯びたものが多かった。だから、「日常の自分とは別の自分を出す」「羽目はずす」、はてには「旅の恥のかき捨て」などということさえあった。

だが、近年の旅には、日常の延長線上の旅、旅そのものが日常、といった感じの人さえ登場している。長期

滞在の旅などはその色彩が強いだらう。なかには、仕事と旅の区分がしにくい人もいよう。移動が日常のものになってくると、そうした人が増えるだろう。私自身も、年に数十回も仕事で旅をしていた時期は、そういう感じだった。

なかには、居住地を二つもち、どちらが本拠地でどちらが旅先なのか、決めにくい人もいる。リピーターといわれる人には、それに近くなる人がいる。

#### ・移動手段の多様化・移動の軽便化

かつてなら、〇〇に行くなら、〇〇で行くという定番があった。いまでは、いくつもの手段があり、時と場合で使い分けが増えている。船か飛行機か、あるいはバスか自家用車かというように、である。途中経路を多様化させる人もいる。それには移動手段の軽便化が伴っている。朝思い立って、遠出することも可能になっている。

飛行機のシルバー割引などは、65歳以上の人向けに、空席があれば随時受け付ける。だから、それをあてにしての旅には、切符がとれるかどうかちょっと不安がある。それでも、シルバー世代にはそうした層が生まれているという事だろう。

多様化は、慣れない人にとってはかえってわかりにくくするかもしれない。インターネットで購入して搭乗するのは、慣れた人にとっては便利だが、不慣れた人はとまどい、不安をかきたて、失敗すら生むことがある。海外旅行でも、軽便化が激しい。ビザ準備なども含めて、何か月も前から予定をたてて準備したなどは、遠い昔の話だろう。今ではビザなしでいける国は多い。かりに必要でも、到着地空港で、若干のお金を払えば、さっさと取得できる国は珍しくない。

10数か国の旅行体験がある私を例にあげると、事前にビザ申請をしたのは、1999年に一年間滞在したカナダと、復帰前の沖縄旅行だった。復帰前の沖縄旅行では、高等弁務官の承認や種痘証明書まで必要だった。しかも申請すれば必ず発行してくれるというものではなかった。ビザがとれず渡航を断念した人はかなりの数にのぼる。

こんな変化のなかで近年の特徴の一つはクルーズ船旅の登場だ。歴史のある欧米型が日本にももちこまれてきたのだろう。

もう一つは、レンタカー利用の広がりだ。以前からあったが、いまでは価格が10年前の半額以下だ。自家用車をもってフェリーで旅をするのをやめて、現地でレンタカーを借りるのが一般化している。沖縄では、それが、観光タクシーを圧迫してしまった。

そんな「便利さ」追求のなか、かえって、スローを求めて、自転車や徒歩を活用する旅も見直されてきている。

2017年06月09日

## 宿泊施設の多様化 旅行社の苦悩と模索 観光の変化4 体験的観光論8

かつての宿泊先は旅館・ホテルが定番だった。安宿はユースホステルなどに限られていた。そのなかで、安価な公共の施設はありがたい存在だったが、今では数少なくなってきた感じがする。他に、親戚知人宅を利用することも多かった。

しかし、今では、一泊10万円の高級ホテルから一泊1000円のゲストハウスまで実に多様だ。その申し込みも、かつてなら旅行社を通して、あるいは手紙・申し込み書で、あるいは電話などでしていたが、今ではインターネット登場に象徴されるように、劇的に簡便になった。それだけにかえて選択に苦勞することさえある。インターネット使用が苦手な人にとっては、予約申し込みは、以前よりハードルが高いものになったかもしれない。

かつての宿泊は、一泊二食という定番があったが、今ではその比率はかなり低いだろう。沖縄旅行についていうと、それは例外的だとさえいえよう。

また、大部屋とまでいわなくても数人で部屋を使う例は激減し、シングルカツインがごく普通になっている。旅館に初対面の人と相部屋で宿泊するなどは、山小屋などを除けば、昔の話になってしまった。

かつては、旅行社に依頼する旅が多かったが、今では、個人ですべて予約手続きをするものが多くなった。インターネットやクレジットカードの普及が事情を大きく変え、加えて紙製の切符類をなくしてカードなどによるものへと変わるまでに至る。そのことが、旅行社の業務の変化を作りだしている。旅行者増加が旅行社不振を招くといった事例さえ出てきている。

そして、用意周到に計画されたものから、旅の進行中に作られていくものへの変化も一部では進んでいる。パック旅行でも、フリープランが中心になっている。沖縄旅行では、航空券・ホテル・レンタカーがセットになっているものがごくありふれている。

クルーズ船のように、交通手段と宿泊、そしてリゾート設備とエンターテインメントを兼ね備えたものが登場し、どこかに旅をすることも含んではいるが、クルーズ船そのものを楽しむというスタイルが出てきている。なかには、どこに行くのか秘密の旅プランさえ登場している。

こうしたなかで、逆に自然派ともいべきものが見直されてきている。野外キャンプ、キャンピングカー利用の旅などもそうだろう。自分たちでおにぎり・手作り弁当など持参の旅も、手作り感覚で喜ばれるだろう。また、貸別荘を使って、仲間たちと楽しむ旅も依然として継続している。

なかには、農園付の宿泊施設が貸し出され、セカンドハウスのように活用する形も広がり始めている。

2017年06月19日

## 多様な交流協同としての旅 地域独自の手作り企画 観光の変化5 体験的観光論9

世界的に観光の旅が大きなブームになっている。ブームというよりも、時流とかトレンドとかいったほうがよいだろう。テレビの旅番組も多様な形で日常的に放映される。観光旅行が生活に欠かせない一部になっている人々が激増しているのだ。そうしたなかで、日本でも、国内旅行客だけでなく、海外からの観光客が激増している。その中で圧倒的な数をアジアからの訪問者が占める。それは沖縄でも見られる。

政治・軍事、経済、文化ということだけでなく、観光旅行が、アジア地域との関係を大きく変え始めている。そのことで、人々の意識・生活習慣の変容を作り始める。たとえば、言語、マナーといったものは、人々の生き方に新たな要素を持ち込み始めている。



さらに、観光には限らないが、多様な地域の人々との交流・協同が、新たな人間関係を築き始める。それは、従来のナショナリズムとかグローバリズムといった視点だけではくくれない極めて具体的なありようをめぐる、人々の新たな意識・生活スタイルの創造を求めてきている。たとえば、日本において、出生ルーツが異なるカップルの生活開始は、かつてのように、1000組ないしは100組に1組というレベルではなく、10組に1組というレベルに近づき、さらに比率をあげてきている。

観光の行く先には、人々のこうした生き方スタイルの変容があることを視野に入れる必要がある。それは、観光客が地元民に道を尋ねることへの対応といった身近なレベルから始まり広がっていく。類似のことは、難民移民問題に広く見られるし、沖縄でいうと、近年のネパール留学生の激増にも広く見られる。

「ヘイト」とか「ゼノフォビア（外国人嫌い）」とかに陥らないように、多様で新たな関係をいかに築くのかという課題に広く直面しているのだ。観光をただ経済的利益とか雇用とかだけでみないで、多様な人々との相互関係としてみていくことが求められる。

その点では、ここ20年、政府だけでなく地方自治体が観光部局を設置しているが、産業的経済的雇用的視点にとどまりがちの段階から、生活や文化を軸とする次の段階へといかに進むのかが問われてくるだろう。

そんななか、婚活の場設定企画、音楽祭、スポーツ応援観戦企画、農業などの体験企画、祭り企画など、集客のためのイベントづくりが広がっている。そこでは、他地域とは異なる地域独自性が求められる。その際、手作り感が重要な意味をもつ。それらが、集客だけでなく、地元住民にとって魅力的なものとして展開し、さらには観光客と地元住民との交流協同になるようにしたい。

2017年06月28日

## 観光地の整備・創出 自然と暮らしの共生と観光 観光の変化6 体験的観光論 10

地元民と観光客が生活・文化レベルで交流・協同できるように、観光客と対応することが求められている。その視線から観光地の創出・整備を考えていきたい。観光地には、自然的歴史的文化的遺産だけでなく、新たな創出という面もある。遺産を受け継ぎ新たな形で整備する試みも多い。

そこで、電柱の地中化などによって、景観を保存するだけでなく創出していきたい。そのなかで、伝統的な観光地だけでなく、ごく普通のところが観光地化されつつある点が注目される。なにげないものが観光ターゲットになる。最近では、マンホールとか、猫とか、シーサー・石敢當などが観光対象になったりする。

自然・文化に彩られた人々の生活を、訪問者とともに共感的に発見しあうものとして、エコ・ミュージアムがあるといえよう。それは、自然と闘うではなく、自然と共生しあうという自然観の広がりつつつながっている。自然と暮らし（人々の文化）の共生の場として、里山が注目されているのもその例だろう。

そして、自然や環境を消費するものとしての観光から、自然と共生し環境保全する観光への転換が強調されるようになってきている。コスタリカにおける入域者数の限定は、その先駆的形態だろう。南城市の斉場御嶽の入域制限日の設定は、そこに向けての一步だろう。

大都会のシンボルとしてのビル群が観光ターゲットになる時代があったが、今では、町並み保存を含め、自然遺産文化遺産がターゲットになりつつある。それは、大量生産大量消費としての観光ではなく、手作りとしての、あるいは手触り感のある観光への移行ともいえるだろう。

沖縄でも、旧来の集落配置やスージグワに注目する動きが出てきている。沖縄各地での町マーイの取り組みもその一つだ。南城市でも小谷マーイを先駆者として、いくつかの集落でその試みが始まっている。

それに伴い、移動も徒歩や自転車など自然感覚に近いものへと移ってきている。自動車道路整備中心から、散策路や自転車道整備中心へと重点を移していく必要があるだろう。

こうした変化は、大量消費型から自然と暮らしとの共生をはかる観光への重点移動と並行している。観光の性格にはいくつかのタイプがある。

- 1) 休養・癒し・信仰
- 2) 交流・共同創造 体験滞在
- 3) 発見

なかには、会議・親睦・調査などの業務のための旅行を兼ねて、1) 2) 3) を行うものもある。業務そのものも、リラックスして行おうというものだろうか。各地から参加者を集めて沖縄で開かれる会議などには、そうした色彩をもつものが結構見られる。

これらの多くは、大規模観光施設よりは、自然と暮らしとの共生をはかることのできる手作り感覚の小規模のものが多い。対照的なものは、テーマパークなどのアミューズメント施設だろう。それらの成功例に目が奪われがちだが、実は、多くの失敗例があることを見落としてはならない。

数十年前には、百貨店屋上にアミューズメント施設があったが、今はその時代ではない。野外体験施設のほうに軸足が移っており、沖縄にはそうしたありようの方がふさわしい。

無論、沖縄にも、美ら海水族館や首里城のような大規模施設があるが、それらも自然遺産や文化歴史遺産的性質が濃いものである。そして、そうした大規模型に依存して観光推進をはかるのは、もはや時代遅れというべきだろう。

2017年07月08日

## 旅の携行品・服装 購入物 観光の変化7 体験的観光論11

観光旅行の変化は、携行品・服装や購入物にも見られる。

旅の記録を、メモ・スケッチなどで取る人は少なくなっているが、今でもする人は少なくない。葉書で絵手紙にする人からいただくと、なぜか有難味がある。私は、メモが多い。一日につきメモ帳10～50行だが。それを、帰宅後ブログ記事にする。

1960年代からカメラが定番になった。私も、1961年の中学修学旅行の際に、コニカを買ってもらったのが、カメラ付き合いの最初だ。無論白黒だ。そのうちに、カラーや8ミリが加わり、そしてビデオへと変わってきた。

こうした媒体の変化は、便利さを増させるのだが、保存で結構苦労する。数年間は大丈夫だが、20年30年すると、「しまった」と思うことが増える。再生できない、再生できるとしても相当な経費がかかることがある。また、携行を煩わしく感じることもある。最近、スマホでより簡便になっているので、使える人は助かるだろう。

スキー、スケボー、ボードなどアウトドア用品を携行する人もいる。私などには無理だし、思いもつかないのだが、好きな人には不可欠のものだろう。

携行荷物は、かつては大型スーツケースなどで旅する人が一般的だったが、今では、より簡便で軽快なものにする人が多い。近年では、そうしたことに役立つ製品が増えている。象徴的なのは、もう40年以上の歴史があるバックパックだ。私も、20年前に仕事で一週間近くのカナダ往復が多かったが、冬服が必要な時期を含めてすべてバックパック一つで旅をし、荷物を預けることをしたことがない。その気になれば、結構やっていける。荷物預けに伴う面倒さや危険を避けられるので、精神的には楽だ。

何十年も前の時代の旅は、人生上の重要なできごとであり、普段とは異なるハレの時であり、晴れ着とまでいわないにしても、きちんとした服装ででかけ、普段とは異なる気分を演出してくれた。今では、普段着感覚の服装での旅の人が多く、それでも普段着ではなく、新品購入で自分なりのおしゃれをして旅をする人は多い。

靴・帽子などには、軽快で新鮮な気分を感じられるものを使う人が多い。なかには、沖縄に来てサンダルとかシマズーリを履く人もいる。

画像豊富なA4大ガイドブックの流行ピークは過ぎたようだ。今では、携帯するスマホによる情報収集が中心になっているようだ。海外旅行では、ガイドブックがまだ不可欠のようだが。また、知人友人からのクチコミ情報がますます重視されているようだ。そうした流れに乗って、インターネット情報でアクセスしやすいように、観光地側も必死になる時代だ。

帰りの土産物についての変化もある。まずは、菓子を中心にした食品類は、依然として変わらない中心をなしている。そうした産品を持つかどうかは、観光地には重要だ。Tシャツに代表される衣類も、土産物の一角をなしている。加えて、記念品となる小物、装飾品が重要な位置を占めている。

その土地にしかない希少価値のあるものを求める人もいる。なかには、一時期「爆買い」で話題になった日用品や薬品などのブームも収まったようだ。かつて人気だった酒タバコ化粧品などの免税品は下降気味だ。40年前の沖縄ではそうしたものが一般的であり、加えてステーキ肉も人気だった。

そうした土産品を買ってみたところ、訪問先製ではなく、安価に製造できる国からの輸入品であることも多い。20年余り前、カナダで革製ベストを買ったが、帰ってから、メイドインタイランドとわかってがっかりしたことがある。

沖縄土産品も、結構沖縄外産品が多い。40年前、知人が台湾貿易に携わっていたが、当時の沖縄土産品のかなりが台湾製品だったことを知ってがっかりしたこともある。いまでも、そんな例は結構ある。離島で菓子を買ったら沖縄本島製だったということはよくある。

2017年07月19日

## 観光格差その1 経済資本 文化資本 体験的観光論12

21世紀に入ってから、格差という言葉が広く用いられるようになってきた。観光や旅にも、この視点から考えたいことが結構ある。こうした分析の際によく用いられる経済資本、文化資本、社会（人間関係）資本という三つの視点から考えてみよう。

経済資本は、観光・旅における金銭使用の問題だから、わかりやすい。宿泊・食事・移動手段などでの価格

差は激しいだけでなく、広がっているように思う。一泊1000円から10万円以上、一食にかかる出費でいうと、自炊で材料費200円だけから1万円以上といった具合である。

私たちの2月のニュージーランド旅の際、ある国際空港の待合室で、高齢者が多いビジネスクラスを使った日本のパック旅行の一行と出会った。聞けば世界一周旅行だった。流行のクルーズ船も部屋による価格差は大きい。

1990年代から始まった価格破壊の動きは、旅や観光をめぐっても激しい変化をもたらした。同じ旅先をめぐる観光パックでも、企画した旅行社で、倍以上の価格差があることを、ニュージーランド旅の際に気付いた。

では、金銭的に高ければ、豊かな観光旅行ができるのかということ、そうとはいきれない。それは、これから述べる文化資本、社会資本がからむからだ。

文化資本は、旅先の観光地が持つものと、旅行者自身が持つものとに区分できよう。文化資本の中身を、旅行先にかかわって区分して、自然、歴史、芸能芸術、信仰・癒しなどをあげることもできよう。また、旅先の文化資本の価値は、一般的に定まっているというより、旅行者自身の生活している場がもつ文化資本との開きの大きさが関係する。暖かい地で生活する人にとって、南極北極に代表される寒冷地は、自然にかかわる文化資本の高さを強く感じさせる。逆に、寒冷地に住む人にとっては、熱帯・亜熱帯の自然に強い魅力を感じる。

信仰・癒しの場合は、信仰する宗教の始祖にまつわる聖地が強い魅力を出す。逆に、自分のスピリチュアリティとは真逆の地が強い魅力を持つことも多い。歴史・芸能芸術にしても同じことが言えよう。

旅行者自身が持つ文化資本は、日常生活の中で得たもの、多様な旅行体験で得たもの、そして、進行中の旅行先についてすでに持っているもの、それらの集合として考えることができる。

したがって、経済資本に恵まれず、金銭的には出費を限定しているが、こうした文化資本の豊かさによって、結果的には、質的に高いレベルの旅になりうる。その逆もまたある。カジノ旅行などがその典型だろう。カジノも一応文化だから、文化資本ゼロというわけではないが、圧倒的に経済資本にかかわるものだ。

2017年07月30日

## 観光格差その2 社会資本 観光者と地元民との格差 体験的観光論13

前回述べた経済資本と文化資本に加えて、社会資本がある。親族・知人・友人・同僚・隣人といった人間関係についての豊かさ貧しさを指し示す言葉だ。

旅の場合についていうと、まず旅先の人々との人間関係の有無・濃度がかかわる。直接的な友人知人はいないが、紹介者仲介者によって、新しい豊かなつながりを持つことも多い。どのような人にガイドをしてもらうかは、大きな違いを生む。また、旅企画そのものが、どういう社会資本をうみだすのかにも注目したい。

だから、高級ホテルに滞在するが、現地との人々との付き合いがなければ、ホテル従業員との付き合いだけにとどまり、社会資本的にはゼロに近い旅になってしまう。

そんななか、パック旅行にも社会資本を意識した企画も登場してきている。〇〇さんと一緒に▽▽旅などもその一例だろう。そのように、どんな人といっしょに旅をするかも、旅の充実度にかかわる。

私の旅の場合、ほとんどが知人友人のいる所に出かけるものだ。旅先で、友人知人と出会い語らい、かれらの案内で、ガイドブックにはない新たな世界を発見し、さらに新たな知人を作ることも多い。

初対面の方たちとの旅であっても、「旅は道連れ」ということで、相互関係を豊かにする場合と、知らない

間同士で終わってしまうかでは、大きな違いを生む。

こうしてみると、旅の充実度には、金銭資本×文化資本×社会資本が反映するといえよう。

無計画ないきあたりぼったりの旅でも、旅行者自身のもつ、各資本の豊かさ、そして旅行先のもつ各資本の豊かさとかかけあわさって、豊かな旅になる可能性はある。そうしたことの違いが、旅の格差をつくりだすだろう。

もう一つ、観光者と地元民との格差やズレの問題がある。ズレが、両者の間にある距離を広げるか縮めるかということがある。たとえズレや格差が激しくても、両者の関係が、異質発見異質協同へと向かう場合もあるし、逆に距離を広げることがある。

たとえば、「豊かな」地域から「貧しい」地域に旅をする際に、そうしたことが見えやすい。かつての植民地などへの植民関係者の旅にはそうした性格が見えやすい。今日でも、そうである。わかりやすい例でいうと、旅行者が、地元住民の一か月の生活費に相当する食事を一食でとることがある。その差額が、その「貧しい」地域を経済的に潤すということがある一方で、地元住民への憐みの情、時には差別感を促進することもある。と同時に、その差異に気付いて、新たな積極的行動へといざなうことがある。そうした旅が、途上国支援にかかわるきっかけを作り出す例はよく聞くことだ。

2017年08月08日

## 京都奈良の寺回り 永平寺 記憶に残る私の旅体験1 体験的観光論14

これから数回、私自身の旅体験について綴ろう。最初は、10代半ばのお寺巡り、仏像との出会いだ。

思春期・青年期の私は、いろいろとさまよっていた。そのなかで、何かを求め続けた。そんな時の手がかりに読書と旅があった。

中学2年の時だと思う。同級生3～4人で京都旅をした。自分たちだけの旅は初体験だった。そして、翌年だったか、奈良への一人旅をした。他にもしたと思うが、記憶が不鮮明だ。奈良旅が記憶に一番残っている。

3月の奈良の街の一角の安宿に泊まった。寺社めぐりをする大学生などが多く、中学生の一人旅なので、かわいがってもらった。泊まった晩は、東大寺のお水取りだった。そこで、大学生たちと一緒に見に行った。火の粉が舞い散る大松明を見て感動した。翌日は、いくつもの寺を巡った。確か雪の朝だった。それらは、すべて事前にルートを調べて、徒歩で周った。

そんな旅を重ねるなかで、仏像が好きになり、自分の部屋は仏像写真だらけだった。

興福寺 阿修羅 秋篠寺 伎芸天 中宮寺 如意輪観音 広隆寺 弥勒菩薩 聖林寺 十一面観音 などだ。建物で魅せられたのは、室生寺の五重塔だ。

こんな旅は、いかにも青春時代のさまよいらしいものだろう。

そんな旅の極め付きは。高校時代の二回の永平寺体験だ。これは、学校が企画し、数十名の参加者が、一週間宿泊し、僧侶たちと同様の生活を送るものだ。私が通った高校は、浄土宗立だが、曹洞宗の禅寺に連れて行った。知恩院など浄土宗の寺にもいったことはあるが。

朝3時半起床 4時からの一時間参禅 作業 食事(100%の精進料理) 昼間の学習企画 夕方から参

禅 作業 食事 就寝など。

参禅では、進んで「警策」（集中を高めるために、板で肩を打つもの）を受けたことがある。（そのシーンが、なぜか本に掲載された。

写真参照 東大学生問題研究会編「全国高校風土記 中部編」1965年三一書房に掲載されたもの



まだ真っ暗で、自然の音しか聞こえない参禅のなか。一回だけ、「恍惚」状態になったことがある。僧侶が、頭を突き抜けて天につながり、尻を突き抜けて地と一体になると語ったが、そんな気持ちだった。

そんな体験のなか、僧侶になろうと考えたこともあった。だから、高一だけでなく、高二の時も参加した。二回も参加するのは滅多にいなかったと思う。だが、あまりにも純真だった私。ショックを受けることもあった。

寺の裏のゴミ捨て場に、ソーセージの皮を発見した。肉食ゼロのはずだが。

トップクラスの僧侶に何でも質問していいと言われて、「永平寺は、戦中にどうして戦争協力したのですか」と質問して、質問停止になってしまった。

くそ真面目な当時の私にとっては、刺激の強い旅の連続で思い出深いことばかりだ。

2017年08月19日

## 沖縄旅 記憶に残る私の旅体験2 体験的観光論15

沖縄旅は、ただ一回で、最初に来た時だ。それ以後は、旅というよりも沖縄生活になったからだ。

1971年11月。翌年の「復帰」を前にして、国会で「返還協定」審議強行採決のころで、沖縄運動のピークだった。集会に参加した翌日、羽田に向かった。

9月に恵美子との生活を始めた直後、恵美子に琉球大学就職の話が舞い込んだ。この旅は「私も採用して下さい」とお願いする就活が第一目的で、恵美子の宮古の実家を訪問して結婚挨拶するのが第二目的だ。

この話をしても冗談としてしか受け取ってもらえないのだが、「事實は小説より奇なり」そのものだった。就職の話は、別の所で書いたもので、ここでは旅の話だ。

まず鹿児島空港で出国手続。そして那覇空港での入国手続と税関手続。全くの外国扱いだ。恵美子は、それまでの帰郷は、船便で4～5日がかかりだったようだ。初めての飛行機利用で、その日のうちに那覇についた。翌年春の沖縄大学への赴任の際は、東京から50時間近くの船便で、引っ越し荷物と一緒に一緒だった。

那覇空港に降りてすぐに、ベトナム戦争に直結した戦車が並ぶ那覇軍港が強烈な印象だった。

那覇についたら、まずは恵美子の兄弟にいろいろとお世話になった。そして、早速就職活動だ。恵美子を琉球大学に採用したいという学科主任の先生に会って、私の事もお願いする。そこで、教育学科の主任の先生を

紹介していただく。事前に、沖縄出身の他大学の大学院生だったかたにお一人の先生を紹介していただき、手紙を出しておいた。そして、恵美子の高校同級生のお兄さんが先生をしておられた。それらの先生には、大変お世話になった。琉球大学での採用公募の話、沖縄大学や教育センターなど、採用の可能性のあるところに連れていってもらい、挨拶しいろいろな情報をいただいた。

実は、それらのなかで出来たつながりが、結果的に1972年の沖縄大学採用、1973年の琉球大学採用への大きな足掛かりになった。こんな風に真っ正直に就職をお願いする例は、当時でも滅多になかったようだ。まさに「直訴」だった。

余談だが、お一人の先生には、ハーバービュークラブでの食事に誘われた。後にハーバービューホテルになるところだが、当時は米軍の高級将校クラブであり、すべて英語の世界であり、最高のとまどいだった。

お世話になった方々とのつながりは、その後20～40年と続いた。こんな知人友人つながりの旅の極致とも言えるべき旅だった。

就活を色々とした後、船で宮古に向かう。宮古丸と記憶している。到着した宮古では、親戚がたくさん集まって、100%わからないマークグチにとまどう。そして、大宴会。歌と踊り。「お通り」体験。驚きの連続だ。



砂山にも行った。あまりにも美しいので、11月末だったが、水着なしで泳いだ。そのころは、1時間いても、会う人がいなかった。東平安名岬の絶景に圧倒される。これが、その後の私の人生に決定的な変化をもたらした沖縄旅だった。

帰りの飛行機は那覇から東京直行のノースウェストだったと記憶している。がらがらでフルコース料理が出た。国際便そのものだった。

「越境」して、いろんな「世界」を感じる旅だった。

この旅のなか、宮古の海岸にて写した写真

2017年08月31日

## イギリス一周とパリ訪問 記憶に残る私の旅体験3 体験的観光論16

1980年、当時ロンドンには私たちの友人が、海外研究のために長期滞在していた。パリには、恵美子の同級生、そして私の同級生のカップルが仕事のために生活していた。

そこで、恵美子が是非行きたい、という。私も行きたい、といって、幼い子供たちを祖父母に預けて出かける。往復飛行機だけを予約し、他はすべて現地で、という無計画だった。3週間の長旅でもあった。

最初は、友人たちのロンドン生活拝見でもあり、小学校や学童クラブのようなところも訪問したし、大英博物館にも出かけた。友人がパブ愛好家だったので、いくつものパブをまわった。地域の社交場・オシャレ場だった。

そのうち、イギリス一周の話がでた。イギリス生活している友人も一周はしたことがなかった。ということで、レンタカーを借り、私が運転手で、友人が英語を使う交渉・宿探しなどのマネージャー役だった。恵美子は後部座席でゆったりしていた。

分厚い道路地図を買い、それをもとに、ロンドンから北上し、エディンバラをとおって、スコットランド北端からネス湖を通り、グラスゴーから南下し、ウェールズを回ってロンドンに戻る長旅だった。毎晩、友人が探すB & Bに宿泊する。田舎に行くと、そこは、B & B機能だけでなく、パブ・レストラン・地域集会所を兼ねており、各地の雰囲気を体験することができた。

ある寒い朝、冷えすぎてエンジンがかからない時、前夜知り合った地域の若者たちが集まってきて、後ろから押してくれて、エンジンをかけたこともあった。

当時のスコットランドあたりでは、東洋人を見かけることがなく珍しがられて、声をかけあったのか地域の人が集まってきたこともある。(写真は、その時の店で買ったマグカップ 37年間使い続けている)吹雪の中を鹿の群れが走るのに遭遇したこともある。



ネス湖のあたりでは、何時間も走るのにお店がない。ついに湖畔で出会った移動販売車で軽食をとった。その車には、ネッシーの絵が描いてあった。これが私たちのネッシーとの出会いだった。

道路は、一般道路も、多くが時速制限 60 マイル (100 キロ) だが、それを越える車は滅多に見なかった。信号のない交差点やロータリーでは、譲ってくれる車がほとんどのやさしい運転ばかりで、大助かりだった。スコットランドの森の中の道では、牛が道路の真ん中で寝そべっていた。移動するのを待つこと 30 分だった。他に待つ車はなかった。

B & Bの朝食は、ジャガイモ、大瓶のミルクつきの大量の紅茶、ソーセージというイギリス式だった。味にそれほど関心がない印象を受けたが、とにかく大量だった。

ロンドンからパリへは、列車に乗って、船に乗り換えてドーバー海峡を越え、再び列車でパリに着いた。国境を超えるのに、パスポートを見せる機会はなかった。EU統合へと向かう時代だった。

パリは、ロンドンとは全く異なる世界だった。ゆったりした世界から忙しいテキパキした世界に移った印象だった。恵美子は、地下鉄出口で、子ども集団のタカリにあって、苦勞した。歩道には、犬の糞が一杯だ。フランス語がまったくできない私には半ば恐怖だった。

ベルサイユ宮殿は、きらびやかな世界だ。他の著名な観光地もまわったが、圧倒されるばかりだった。ここで働く友人たちに感心するばかりだ。

そのころは、一生のうち一度ぐらいは海外に行ってみなければ、という感じであった。後に繰り返し出かけ、海外生活することになるとは、全くの想定外だった。その意味では、充実した旅体験をした。



2017年09月11日

## ネパール 記憶に残る私の旅体験4 体験的観光論17

友人の神保映さんが、ネパールのカトマンズに滞在して、NGO「ネパール教育支援の会」を立ち上げ、私にも協力を求められたので、出かけることになった。神保さんは研究会仲間だったが、早期退職をして海外と関わる活動を展開している先輩格の方だった。



写真は、2017年8月26日に開かれたNGO「ネパール教育支援の会」20周年記念式典の様子

海外旅行は、前回書いたイギリス・フランス旅の後、90年代に入ってカナダ西部の旅をただけであった。ネパール旅は、神保さんの取り組みにかかわる意味もあったが、アジアに触れる絶好の機会だと思って、今回も恵美子と一緒に旅した。

これまた往復航空券予約だけで、他はすべて現地に行ってからということを出かけた。現地では、神保さん宅にお世話になった。寺院めぐりなどの観光もしたが、NGOが支援しているストリートチルドレンのための学校訪問や懇親会での語らいやネパール人家族のお宅訪問など現地生活を体験することが中心だった。

驚くほど印象的なことの連続だった。自分の事前知識にはない想定外のことばかりだった。いくつか並べよう。

### ・多人種多民族の世界

それまでの私の知識では、人種という大きなくくりがあって、同じ人種のなかにいくつもの民族があるというものだった。だから、同じ民族の中に、いくつもの人種の人がいるというのは想定外だった。カトマンズを中心にした出会だったので、ネワール族の人が多かった。ある晩、懇親会がもうけられたが、同じネワール族だけど、肌の色がさまざま、コーケイジアン（白人）もいれば、モンゴリアンもいた。

ここは、数百年以上前、いや数千年前から多様な人々が行きかい、交流する地域なのだ。だから、言語も実に多様だ。公用語は、数百年前に外からきて支配的位置についたインド系のネパール語が中心だが、イギリスの植民地支配もあって、英語もそうだ。それに、民族ごとの言語が使われる。

### ・ヒンドゥー教。仏教の世界

宗教的には、ヒンドゥー教が多数派だろうが、仏教徒も多い。特にチベット仏教は大きな影響力を持っている。この二つの寺院が各地で見られる。ヒンドゥー教の中心的寺院パシュパテナート寺院も訪問したが、聖なるガンジス川上流に位置し、川べりで火葬が行われ、遺物の灰は川に流される。

その近くには、ヨガ行者などの聖人が生活している。

### ・カースト制度

ヒンドゥー教だけでなく、仏教徒のなかにもカースト制度が現実的なものとして生きている。それは、職業

ごとに組織されている。神保さんの家で、彼が掃除をしていると、掃除カーストの人の仕事を奪っていると叱られたという。同じように、ガーデニングをしても、仕事を奪っているといわれたという。だから、カースト制度は職業保障生活保障と結びついているという。

ある部族は、カースト制度から逃れるために、部族ごと改宗したということだ。

#### ・ストリートチルドレンの生活

神保さんが始めたNGOは、貧困な子どもたちのために学校づくりから始まったが、学校を用意するだけでは、子どもたちは集まってこない。学校にいくと、その時間働けないので、生活費食費が得られないという。そこで、食事支給も始めた。かれらは、「物乞い」という職、あるいは、寺院で禁制の牛革靴を観光客から預かるという職に就いていた。

こんな風に、驚くことばかりだったが、エベレスト周辺の飛行機旅行も含め、そこそこの観光もした。第二回目のネパール旅は、NGOの現地での折衝にかかわることを中心にしたが、間をぬってポカラ旅行もした。その時、レストランで、地元の踊りを見せてくれた。私は、カチャーシー式に舞台でいっしょに踊った。

この後、タイ・台湾・バリなどのアジア旅の最初がネパールになった点でも、ネパール旅は記憶に色濃くとどめている。

2017年09月21日

## 無数の名古屋―東京日帰り往復 記憶に残る私の旅体験5 体験的観光論18

今回の旅の話は、仕事上の必要で、遠距離を短時間で往復する話だ。その最初は1982年のころだったが、沖縄から研究会出席のために、何回か東京まで日帰り往復したことだ。そのころ、確か早朝の東京行き飛行機が設定されたことが背景にある。午前11時ごろ東京について、昼食をとって会議に出て、夕方の飛行機で戻った。なにかもったいない感じがしたが、日程上の都合でそうってしまった。1時間ぐらい時間が空いたら、書店で本を購入してくることもした。

1990年代に愛知に住むようになると、東京日帰り往復が頻繁になる。月に1～3回のペースだった。他にも、全国各地にでかけることが月1～2回あった。飛行機使用が年に10往復を越える年もあった。ビジネスマンのような生活で、移動中の近隣の席もそんな感じの人たちだった。ある年、JRに払った料金が100万円を越した。飛行機代もそれに近かったろう。

これらの旅の隙間の時間に、目的地周辺を歩くことが多かった。こんな仕事旅のおかげで、全国すべての都道府県を訪問した。そして、全国に友人知人ができ、つながりが広がったことが、私の大きな財産になった。

東京往復についていうと、15時過ぎに自宅または職場を出て、名古屋発16時過ぎの新幹線に乗り、18時ごろ東京駅から会場に向かい、18時30分までには到着する。帰りは、新幹線時刻の都合で、20時45分には会議を中座し、21時頃の新幹線に乗り、名古屋駅を経て自宅着は11時50分ごろだった。行き帰りの車中で食事などを取り、睡眠をとることも多かった。

会議・研究会ともに充実したものだっただけに、疲労蓄積は大きかった。時には、こうした日程が連続し、週に数回の飛行機・新幹線利用という事もあった。ある時は、愛知→北海道→沖縄→愛知ということもした。

その間には、授業をはじめとする大学業務もある。1993年ごろからの10年間は繁忙のピークだった。90年代後半には、これらに海外出張まで加わった。そして、ついに2000年にはドクターストップがかかってしまった。

その時は、それはそれで充実していたが、今から思うと、とんでもない繁忙ぶりで、二度と繰り返したくない。そんな状態の人に会おうと、早くそこから卒業してほしいと思う。

2017年10月01日

## カナダ アルゴンキンのアウトドア体験 プリンズ・エドワード・アイランド訪問 記憶に残る私の旅体験6 体験的観光論19

1999年4月～2000年3月のカナダでの研究生生活のなかには、いくつかの印象深い旅がある。トロント到着直後に購入したトロント・トレイル地図を愛用し、徒歩でコースほぼすべてをまわった。広大な市内だが、丘のようになっており、その丘を縫うように川や谷があり、それらに沿って、トレイルが作られていた。1時間ほどの心地よいコースを随分楽しんだ。

トロント外でも、いくつか楽しんだが、二つに絞って紹介しよう。一つは、滞在していたトロントの北にあるアルゴンキン国立公園での野外キャンプだ。2回したが、二つがこんがらがっているの、合わせて紹介しよう。日本人研究者・学生たちと、現地ガイドとともに出かけた旅だ。ガイドは、幹事役の人が探してきた人で、一人は陽気なイタリア系だったことを覚えている。

・熊が生息しているところで、夜のリュックに入っている食べ物を襲うというので、夜はすべて、テント内ではなく樹木の高い所にぶらさげた。それでも、チョコレートをかじった後が見つかり、自然の中であることを実感した。

・かつての森林鉄道跡を歩いている時、陽気なガイドが、突然、「静かにして」というサインを出す。近くに狼がいるという。しばらく待ってから、再び歩く。

・湖では、驚くほど大声で鳴く鳥、確かルーンといったと記憶している。カラスか鳩くらいの大きさだが、体格の10倍以上ある動物に匹敵する声量で、あたり一面を突き破るような声で鳴いて、驚かせられた。

・カヌーで川を上るが、途中でビーバーダムに遭遇。カヌーをかついで、通り越す。カヌーを漕いでいると、偵察係とおぼしきビーバーが、こちらを観察しているのを目撃する。小さいのに、人間がつくるものに匹敵するほど立派なダムを作る。

・キャンプでは、大きな石を熱くして、テントのなかで水をかけて、湯気を出して、サウナを楽しむ。

・湖では、カヌーだけでなく、2～3人用のポート漕ぎも楽しんだ。ルーンの声聞きながら。

・出かけたのは、夏だったが、付近にある小屋には、多くの人が滞在していた。夏休みは、家族など何人かで、夏季休暇をとるのは、ごく普通のことのようにだ。同じ光景は、フィンランドでも見た。裕福な人ではなく、ごく一般の人々が、長期夏季休暇を楽しむ習慣が定着している。

プリンズ・エドワード・アイランド島。友人がその地の大学で働いているので、訪問滞在する旅だった。人口十数万の小さな島だが、れっきとした州であり、連邦国家カナダを構成する一員だ。子ども向けデザインを

思わせる可愛い州旗が気に入った。

・「赤毛のアン」の島で有名だが、訪問したのは11月で、観光シーズンは終わっていた。レンタカーを借りて、島内一周をした。カナダの運転免許も獲得したのだが、運転したのはこの時の一回だけだ。

有名な「グリーン・ゲイブル」はあいていたが、シーズンオフなので、近隣のレストランもしまっていた。やむをえずガソリンスタンドの2階のレストランで、道路工事作業員たちと食事を共にした。

・島の色 土の赤、そして緑、もう一つの色（思い出せない 青？白？）の三色のコントラストが美しい。

・放課後の子どもたちが屋外で遊んでいるのを見かけたのは、この島だけだった。子どもたちだけで、家や家周辺にいと、児童虐待で取り締まる州が多いなかで、この光景はほっとさせてくれた。

・友人たちの話だが、冬がすごいらしい。島を取り囲む大西洋が凍り付いて、大陸と地つながりになるのだが、流水が凍り付くので、でこぼこが激しく、交通不能になるという。橋でつながって以降はいいが、その前は大変だったらしい。

世界の多様さを知る一年間だった。充実していたのは、多様な人々との出会いだった。世界の数十という国からの移民難民を受け入れている国だからだ。我が家を訪問した人々も、中南米、ヨーロッパ、中東、アジア、アフリカと実に多様で、多様な世界を実感する日々だった。日本に帰ったあと、どこに行っても、同じような肌色と顔つきの人々がほとんどだという状況にカルチャーショックを感じたほどだった。

写真は、現地で取得した運転免許証



2017年10月12日

## 人生創造としての観光——私流観光論 連載のまとめ 体験的観光論最終回

半年余りと長くなった連載も今回でまとめよう。

あらためて、観光について、私の考えを整理してみると、消費としての観光ではなくて、美しく豊かなものを感じることを通して、人間回復、人生創造へと歩むというものだ。観光は「見る」ことをきっかけとしながらも、感じる（味わう・体験する・つながる・交流する・相互訪問する・共同創造する）ことを通して、人生創造へと向かうとあってよい。

消費としての観光は、短期的・一時的なもので、観光地はブームにさらされる。ブームは短期間のもので、せいぜい5～10年のものだろう。そうではなくて、人生期間をとおして、できれば50～100年というスパンで観光を考えたいものだ。だから、それは生活・人生と結びつくだ。

私自身、書いてきたようにたくさんの旅をしてきて、その一つの結論として、現住所の南城市玉城字中山に

生活している。その過程は、「沖縄田舎暮らし」（アクアコーラル企画2007年刊）に書いたとおりだ。

こうした視野を持たないと、観光地は一時的なものとなるだけでなく、多くの問題を抱え込む。

- ・ ブームが去った観光スポットが、幽霊屋敷のようになる例。とくに過度に人工的なイベント施設の場合、そうなりやすい。○○ランド、○○村といわれるようなところには、そういう例がある。
- ・ ブームが爆発してしまい、制御不能なほどの訪問者で溢れ、バルセロナのように、住民から観光批判が巻き起こる例。
- ・ 観光公害への対策に頭を抱える。ゴミ処理、溢れるレンタカーでの交通事故対処・交通渋滞、訪問者の常軌を逸した騒音発生。住民の信仰・生活への妨害

現在の日本で人口増を継続しているのは、東京を中心とする首都圏と沖縄だが、沖縄が首都圏のようにならないためにどうするか、を真剣に考える時が近づいているようだ。首都圏での観光者は、アトラクションと現代都市の魅力を求めてのものが多く、沖縄の場合は、それと対照的である。

観光客1000万人を目指すという言葉を目にするが、沖縄の観光訪問者のキャパシティはどれくらいだろうか。持続的なありようを求めるなら、もはや限界を超えているという見方もありうるだろう。

拡大を考えるよりも、持続性を考える時期に来ているように感じる。

訪問者には、観光者だけでなく、マンスリーマンション型滞在から本格的移住の方々まで視野に入れる必要がある。それは、沖縄外からだけでなく、那覇などの都市地域からの田舎への移住者をも視野に入れる必要があるだろう。

田舎で人口増があるところは、そうした例であろう。若い子育て世代は、田舎生活と都市生活とをミックスしたありようを求める。その点では、発見・刺激・落ち着きのある観光的要素と、暮らし方生き方で探求ができる生活、それには近隣付き合い、教育環境、そして保育所・学童クラブなどの子育て環境とが合わせて充実することが求められる。中高齢移住者にも似た例がある。生活型観光、福祉型観光とでもいえようか。

# 2013～2017年の旅

ニュージーランド・本州・九州

2017年08月29日

## ネパール教育支援の会20周年記念式典参加 久々の首都圏旅

26日小田原で開かれたネパール教育支援の会(NESA)20周年記念式典に参加した。同会の20年は、濃厚でドラマティックなものだ。ネパール自体が、この20年激動の時期だった。最近では、大地震が襲い、同会が支援する裁縫学校などが倒壊するなどの困難に見舞われた。

遠くから眺めているだけではわからない困難、表にはでてこない想像を超える困難が襲う。それでも、組織が継続してきたのは、現地のネパール人、そして支援する人々の、なみなみならぬ努力の成果だ。詳しくは記念誌をご覧ください。

私は、なぜか初代会長を務めたので挨拶したが、この会とかかわりあって生きてきた人の人生ドラマが興味津々で、そのことに触れつつ語った。

10年以上ぶりにお会いする方々がたくさんで、懐かしさと同時に、多くの方々の人生ドラマを聴くこと自体がとても楽しい出会いとなった。学生で現地でのボランティアにかかわった人が、生き生きとした職業人&母親になり、壮年で活躍していた人が、初老期に入って、味わいを見せている。語らいの時間がどんどん過ぎていく。

と同時に、これからのNESAと各々の人生がどう展開するのか、これまた楽しみだ。



ネパールからこられたNESAが支援するパタン工房長のラジャーナさんにも、ほぼ20年ぶりでお会いした。歴史を背負って、遅く美しく生きておられる。

パタン工房などで製作した芭蕉布ショールが1500円で販売。驚いた。しっかりしたものだが、沖縄製品と比べると、10～100倍の価格差だ。即決で購入。

式典の前夜、神保さん宅に10数年ぶりにお世話になった。お宅にお世話になったのは、数えきれない。二人で遅くまで飲み明かし、朝彼の勤務先にも出かけ、彼の実践を拝見したことを思い出す。

式典の夜は、真鶴で皆さんと語り明かす。こんな体験は、かつては日常的だったが、最近では何年ぶりだろうか。

翌日は、真鶴半島の森と磯を歩く。魚付き林だが、原生林に近い。楠や松の巨木たちだ。

写真は、散策した真鶴半島の林

二泊三日だったが、首都圏に出かけたのは、何年ぶりだろうか。記憶が出てこない。10年近いと思う。電車に乗るのも久しぶり。ローカル列車の雰囲気は少しは残していた東海道線が、今や山手線の通勤列車の感じ。平日昼間なのに。

乗客の服装のセンスの良さ、というか「よそいき」雰囲気に感じ入る。駅弁を買って列車のなかで昼食を食べようとしたが、場違いな印象を持たされてしまった。

首都圏に来ると、旅中に災害に出会ったらどうしようと不安に駆られるが、幸い何もなかった。

2017年04月05日

## 父の法事で岐阜・名古屋に行く ノリタケの森で絵付け体験

父の13回忌の法事で、私が生まれた岐阜に久しぶりに行く。いつものように、法要の後は参会者の親戚が集う食事会。いつものと違うのは、従兄のギター演奏から始まって、私たちの歌唱（恵美子のシンギングボール付き）、義兄の詩吟があったこと。いつもと異なる展開で、とてもよかった。参会者とは、父のことを含め、60年前の思い出話を久々にした。

写真は、私の生家があったところ。道路建設でなくなり、その一部が畑になっている。昔の面影は、写真中央奥にある隣家の銀杏だけ。全く様子が変わってしまった。

名古屋駅前に宿泊する。名古屋駅と生家があるところとは名鉄電車で往復するが、かつてと比べると、大変便利になり、40～50分で行けた。

飛行機の時間の都合で、名古屋駅周辺を歩くが、高層ビルがぐんと増えた。駅近くに洋食器のノリタケを記念する博物館のような施設「ノリタケの森」があることを、つい最近知った。名古屋周辺には通算すると20年近く住んでいたが、行ったことはなかった。知らなかったのだから。

展示されているコーヒー茶碗に、我が家にあるものと同じものを見つける。結婚式の引き出物でいただいたものが、実はノリタケ製品だったのだ。

そこで、真っ白なボンチャイナのお皿に絵付けをする体験に挑戦する。初体験で、手が震えて大変だった。私は唐草模様挑戦。下絵があるので難しくはないが、かなりのアレンジをしてしまった。10日間で、焼いたものを送ってくれる。できあがったら紹介したい。

下左写真は恵美子の絵付け風景

絵付けの建物前で、素晴らしい桜に出会う。今年は寒いせいか、出会った桜のほとんどが蕾膨らむの段階だったが、この桜だけは満開だ。





2017年02月24日

## 南半球体験 星月太陽 ニュージーランド旅1

一週間ほど、二人でニュージーランド旅に出かけた。完全な団体パッキングツアーは初体験だ。70歳になると、自分たちで企画し、宿泊や交通機関の予約を取ることが難しくなるので、ツアー会社にお任せの旅行だ。

旅で印象に残ったことを何回かの連載で綴ろう。

まず、初の南半球体験。

私はどこに旅をするにしても、太陽などの自然をよりどころにして、自分が居るところと方角を確認する習慣がある。それは、南に太陽があることが前提になる。ところが、南半球では、北に太陽がある。そこから東西南北を割り出すわけだが、しばし時間を要し、3日目ぐらいに慣れた。

余談だが、ニュージーランドでは、北向きの家が好まれるのは当然のことだ。バスの座席も、北側に陽が射す。

空気がきれいなところなので、星空観察に絶好だ。一行に空の事に詳しい人がいて、朝6時ごろの空で、南十字星を教えていただく。夜明け前なので、4つの星の内の3つは確認できた。

2, 3日後、デカポで一行と一緒に星空観察に出かける。残念ながら、空に詳しい方は加わっていない。

そこで、自信なさげに、多分あれが南十字星だろうと、説明する。他にも質問されるが、「初めて見る星ばかり、全くわかりません」と応える。

オリオン座を発見するが、どうもいつも見るものと違う。上下が逆転しているのだ。しかも、北側に見える。天の川らしきものが、強烈な印象をもって迫ってくる。天の川は夏に見られると思いこんでいる私はびっくりだ。沖縄でいつも見ている天の川の下方の続きを見ているということに、そのうち気づく。

星空観察をしていると、いくつもの人工衛星や流れ星に出会う。沖縄でも都市に住んでいる人は初体験で、歓声があがる。

自宅に戻ってきて、星の図鑑を見て、以上のことが間違えていなかったを確認する。

左写真 マウント・クックを南から見る。日陰になっている箇所が多い。



右写真 北向きの絶好の住宅 日当たり抜群だ アフタヌーン・ティーをいただく。



2017年02月27日

## フィヨルド 氷河 牧場など 自然に出会う旅 ニュージーランド旅2



フィヨルドは少ない。宿泊地のクイーンズタウンからバス半日で観光船が出るフィヨルドの最奥地点に着く。そこから、海岸（この海は、タスマン海と呼ぶ）あたりまでの往復2時間のクルーズだ。

フィヨルドの絶壁から落ちる滝のしぶきを一回浴びると10歳若返るといふ。私は、若返りすぎて、前世まで出かけてきたと、冗談を交わす。

### 2) マウントクックの麓のトレッキング

トレッキングというよりは、ハイキング。年齢の高い私たちには、ちょうどいい。氷河近くまで行く。氷河が崩れて雪崩になるのも見る。

完全パック旅行なので、私たち自身が希望し企画したという形ではない。だが、たっぷりの企画の中の多くは、私が好きな自然との出会いだ。いくつかを紹介しよう。

#### 1) フィヨルド

ニュージーランドは北島と南島に分かれているが、南島の西側は、高山とフィヨルドが連なる。フィヨルドの一つに、ミルフォード・サウンドがある。自然保護のため、陸側から入る





写真は、マウントクックと氷河湖



### 3) ロトレアの間欠泉 (左写真)

北島では、間欠泉を見る。居る間にも噴き出したが、写真に収めるのはなかなか難しい

### 4) 動植物

原生林は、放牧のために切られたところが多いが、自然保護政策が日本よりはるかに徹底されており、巨木に出会うことも多い。

哺乳類などは限られており、天敵が少ない条件のなかで、固有種が多くみられるが、シカやポッサムなど人間が持ち込んだものが、生態系を崩しているのが、それらの駆除に追われているとのこと。ポッサムはオーストラリアでは保護されているが、ニュージーランドでは駆除対象になっている。

5) バスによる長距離移動の連続だったが、車窓からは、牧場をみるのがほとんど。羊、牛が圧倒的に多いが、時に、鹿、アルパカの牧場も見かけた。羊と牛を一緒に放牧しているところもあった。いずれも、牧草を食べており、日本のように配合飼料が主体になっているのは大違いだ。

牧畜以外の畑は少なく、まれに小麦や牧畜用





飼料を見かけるぐらいだった。数百メートルもある巨大な散水設備が目を引く。

2017年03月05日

### ガーデン ニュージーランド旅3

バスで長時間移動することが多いツアーだった。北島を回っている時は、35年前に回ったイングランドの中北部を思い起させた。どことなく似ている。地形が似ているというよりも、イギリスからの入植者たちがそんな景観を作りだしただろうな、と想像する。では先住民のマオリが作りだした景観はどんなものだろうか、と質問したくなるが、それはよくわからなかった。

南島にいくと、高山やフィヨルド、そして広大な牧場地帯なので、北島とちょっと異なるが、短期間滞在なので、よくはわからない。

それにしても、イギリス庭園の流れをひいているのか、あちこちでのガーデニングが目についた。とくに、



最終日のクライストチャーチでは、庭園めぐりがテーマだったこともあり、目立った。



そのなかでも、すっかりエンジョイしたのは、個人宅でのアフタヌーン・ティーの会だった。私と世代が近いホスト夫妻の家と庭が公開された。素敵な庭だった。バラなどの花々をはじめとして、素敵な庭づくりだった。100年余りにわたって、代々引き継いできた庭のようだ。建物もそうだ。

ここで初めて英語で話す機会があった。パックツアーは、もっぱら観光関係者との出会



いで、地元の方々との出会いが稀という特徴があり、日本語でほとんどが賄える「気楽さ」があるが、文化交流・人間交流が少なくなるという弱点があるようだ。

地元の方との珍しい会話ができて、楽しい時間となった。



クライストチャーチは、数年前の地震で大きな被害を出した所で、現在もなお復興過程にあった。自治体が管理する訪問先のハグリーとモナベイルの公園も、立派なイングリッシュ・ガーデンだった。

2017年03月10日

## たくさんの発見 ニューゼaland旅4

連載の最後に、私の旅メモから集めたものを並べていこう。

- ・多様な人々が生活する多文化のニューゼaland
- ・多文化政策は1990年からだとのことだ
- ・全体におおらかな雰囲気、せかせかしていないのがよかった。
- ・週40時間労働の提唱国だが、現在の長時間労働は、日本に次いで二位だそうだ。
- ・産業は、農業が一位で、観光が二位だそうだ。



前ページ写真は、国立彫刻学校での彫刻シーン 入学資格にはマオリの血を引いている事が必要だとのこと

- ・ホテルの室温がすごく高い。各部屋で温度設定できない時は、窓を開けて寝た。
- ・真夜中にホテルの火災報知器のベルがなって、客全員が屋外に避難。結果は何もなかった。
- ・ホテルで働く人達は、20代30代が多い。若い世代が中心の雰囲気
- ・観光関連、とくにガイドで働く日本人女性がすごく多い。
- ・世界中からワーキングホリデーの若者が集まる。マウントクックのレストランは彼らで支えられているようだ。

かれらの話。「日本人客は、とてもマナーがよいが、病人ばかりいる。食後に薬の包がたくさん置かれているから」とのこと

- ・ほかの観光客には、中国・韓国などのアジア系が多い印象だった。
- ・ホテルの食事にはビュッフェ形式が多いが、野菜が少ないのと対照的に果物が多い。

- ・現地の人との接触・会話が最小限なのが、パックツアーの難点 日本語でまかなえてしまえる
- ・道路の速度制限は100キロ。カーブ箇所では、65キロとか75キロとかに落とせという標識がある。



・日本車が多いのは、人は右車は左側通行だからか。10年20年と乗っている車が多い。日本がいかに早めに乗り換えているのかを示しているようだ。

・ニュージーランドでは、病気だと全額自己負担だが、けがだと全額国庫負担だそう。だから簡単には病院にいかないとのこと。日本は、かなり病院依存であることが間接的にわかる。救急車も民営で利用すると高額料金がとられるようだ。

写真は、トレッキングの道端に咲く、小さな花

・亜熱帯？ 温帯？ 亜寒帯？ ホテルの植栽は亜熱帯的で沖縄に近い。でも、夏なのに北島でも、20度前後で、現在冬の沖縄とほぼ同じ。

- ・植物の固有種の花はとて小さい。虫も少ない。鳥も少ない。
- ・植物には、夏でも茶色っぽいものがある。枯れているのではなく、そういう色だそう。

・ツアー参加者には退職後または退職前後の方が多い。他のツアーでは、80代の参加もあるとのこと。信じられない。私たちのグループは全員海外観光旅行経験者だった。近年では、それを楽しみにしている人が多いようだ。

・トレッキングで、氷河が削ってできた土のほこりが、私ののど・気管支を痛める。帰宅後、回復するのに10日余りかかった。

写真は、マウントクックで見た氷河



2016年03月24日

## 子ども・孫家族と過ごした数日間の鹿児島 鹿児島旅1

一年ぶりに、息子家族に会いに鹿児島に出かけた。いつもは、かれらが沖縄にくるのだが、今回は私たちが鹿児島に出かけた。3年ぶりだ。その時は、桜島の火山灰にやられて、大苦勞した。幸い今回は火山灰は少なかったし、PM2.5も少なかった。それでも、マスクをかけて外出した。

無計画の旅で、ゆったりと孫たちと過ごした話題をいくつか書こう。



### 1) シニア割引

最近、シニア割引を使っただけの旅が多い。半額以下の安価がいいのだが、繁忙期のこの時期は割引率が低い。事前に空席状況を調べて空港に出かける。今回も、空席が多い日時をねらって出かける。日程に余裕がある時期であることが条件だが、使い勝手はよい。

鹿児島便は一日二便なので、融通はききにくいだが、今回は無事、往復希望通りになった。偶然だが、私たちの飛行機が出た後で、鹿児島空港は事故のため閉鎖になった。

### 2) 温泉

鹿児島は温泉が多いが、鹿児島市内も大変多い。滞在最後の晩に、車で10分足らずの中山温泉に行く。銭湯なので390円だが、本格的温泉。泉質は本格的温泉並みというより、それ以上だ。飲用もできる。

連休の中日だったので、親子連れ（中には三世代 私たちもそうだった）で混んでいたが、上等な気分になれた。

もう一カ所、蒲生にある温泉宿にも一泊した。10数年ぶりに値が張る施設に泊まった。ここもかけ流しの上等の温泉を堪能した。一泊のうちに3回も入浴する。孫たちと一緒に入ってエンジョイする。

温泉宿の近くにある大楠と、龍門司焼を訪問する。大楠は樹齢1500年という。龍門司焼は、朝鮮から連れてこられた陶工たちの子孫が開いて400年の歴史がある。壺屋焼などの沖縄の陶芸に似ている。おそらく、沖縄の陶器の先輩格にあたるのだろう。登り窯が立派だ。

ガイドブックにも、温泉紹介が多い。次の機会にもエンジョイしたいと思う。



### 3) 家族でゲーム

孫たちの希望もあって、7人でゲームをする。タブレット型コンピュータを使用するゲームだ。人狼ゲームというので、ルールが難しい。当たった役割（秘密）で、チームに分かれて勝負するものだ。

しかし、私たちは、ルールの理解が遅い。とんちんかんな対応をする私たちを孫たちが楽しむという感じ。ついに、一人の孫が丁寧にルールを教えてくれて、やっとゲームに乗れるようになった。私などは、ゲームは二の次で、皆で楽しむ雰囲気がいいと思っているので、笑いを誘う役目のようなものだった。

30年前、家族でゲームをしていたころを思い出す。

2016年03月26日

## 奄美の里 鹿児島学習 穏やかな家族 鹿児島旅2



### 4) 奄美の里

大島紬の紹介を中心とする広大な施設の「奄美の里」を訪問。奄美の民俗・庭園・紬の織場・レストラン・スポーツ施設などの複合的なものだ。立派な庭園だ。

たくさんの織機が並んだところは、休日のためだろうか、2つだけ機織り作業がされていた。写真は紬人形と庭園。

私はよく織物の財布を使う。有松絞、芭蕉布などは、擦り切れるまで使用した。今は普通のものなので、ここで大島紬のものを購入した。以前に、大島紬の携帯電話シートを使ったことがある。地味だが、贅沢な雰囲気を醸し出す。

その後、家族でピンポンをする。テニス部・ピンポンクラブに所属する孫ともするが、卓球歴30年余りの私が余裕の遊びだった。それでも結構楽しく過ごす。4年生の末孫とは何回ラリーが続くかをして、15回までできた。

その後、レストランで鶏飯を中心とする昼食。人気があるのか、満員盛況だ。早めに入場してよかった。鶏飯はシンプルな奄美の郷土料理だが、人気が出るだけの味だ。

### 5) 鹿児島紹介本を何冊も読む

大型書店に出かけて、鹿児島紹介本を数冊購入。息子所有の「鹿児島検定本」を含めて、数冊を読む。鹿児島入門のつもりだ。これまでも鹿児島は数回訪







問したが、今回初めて鹿児島学習をした。

これまでは、沖縄・琉球との関連で、鹿児島・薩摩を学んできたが、今回鹿児島の地元の視点を中心にした本を読む。新たな視点を感じた。

4つの巨大カルデラ。温泉。郷中教育。近代技術導入。鎖国的ありよう。廃仏毀釈。鹿児島方言。人々のキャラクター……

いろいろと興味深い。

でも、上っ面学習段階だ。今後、何度か訪問することがあるだろうから、その都度深めていきたい。

#### 6) 穏やかな家族

連休ということもあって、息子の仕事、一番目の孫の部活で出かけた以外は、三世代家族7人でゆったりした時間を過ごした。3年ぐらい前までは、孫たちが小さかったためもあって、孫同士の喧嘩場面がしばしばあったが、今回は一度もなかった。けっこうおしゃべりな孫たちなので、話もよくした。

この後、思春期に入っていくので、また新しいステージを迎えるだろう。だから、今が一番穏やかな時期だろう。受験に夢中になって、塾通いをするというタイプではないので、ゆったりとした少年期を過ごしている感じだ。

私たちの子育て期と比べて、ずっと穏やかで平和な関係を築いている。今後、どう展開していくだろうか。

2016年03月28日

### 仙巖園 桜 桜島 散策 鹿児島学校話題 月桃活用と与論島 鹿児島旅3

#### 7) 鹿児島歩き

今回もいろいろと歩いた。PM2.5と火山灰を警戒して、マスクをしながらだが。

まず仙巖園（磯庭園）。2回目だ。ここは本当にいい庭園だ。桜が満開に近づいていた。（写真は19日撮影）ここから見る桜島も美しい。



息子家族の家の近隣も散策する。シラス台地に、雨で切り刻まれた谷と丘が交互にあるところだ。鹿児島市の平坦なところは、かつては海だったところのようだ。住めそうなところは至る所に宅地開発が進んでいる。だから、散策のほとんどは坂道だ。そして景観がいいところが多い。火山灰さえなければ、散策に絶好なところだろう。

#### 8) 鹿児島県の学校話題

知人の子どもが大学受験を迎える。孫も4月から中三になるので、受験など学校の話題がしばしば飛び交う。外から移住してきたものにとって、分かりにくいことが多いようだ。

トップ高校は悠々とやっている。ただし浪人が多いそうだ。

No.2やNo.3の高校は、トップ高校に追い付けないというので、色々世話をするらしい。

公立に行きたくても、必ず私立を二校受験させるらしい。

小学校に制服がある。

私立中学校をすすめる教師がいる。……

百人一首部がある高校がある。

孫たちは、マイペースで、周りから見ればゆったりとやっているようだ。自分たちなりに考えているようだが。

#### 9) 月桃活用 与論島 息子の研究と地域貢献活動

息子の研究の話も面白い。与論島に出かけて月桃の活用について、研究調査結果をもとにプレゼンをするという。地域貢献活動を継続してやっているようだ。以前に月桃を送ってくれと頼まれたが、その理由がわかった。

それにしても、今時の大学教員は繁忙のようだ。息子流でやっているようだが。

2015年09月08日

### 倉敷歩き 旅1

3~7日の五日間、岡山大学で開かれた日本生活指導学会とその前後の旅をした。一人でかなり余裕をもった旅は、久しぶりだ。往復航空券は、マイレージを使い、ホテルの予約はしておいた。多少収集した情報をもとに、その日ごとに気ままに歩いてみた。

今回歩いたのは、初めての所ばかりだった。岡山は、45年ぐらい前の全生研大会出席以来だ。新幹線などで通過することは多いが、ゆっくり訪問するのは初めてだ。

最初の倉敷は以前から訪問したいと思っていた。丸一日の滞在で回った主なところ。

町並み散策

大原美術館

倉紡記念館

倉敷民芸館

大橋家住宅

最大の印象は、大原美術館。西欧近代絵画の著名なものがずらりだ。音声ガイドを聴きながらまわる。平日

午前なので、2時間ほど、ゆったりとまわられた。圧倒される。と同時にガイドが語る絵をめぐる物語を楽しめた。美術館に深い縁のある児島虎次郎を、これまで知らなかったが、生命を感じ、いいなあと思う。

他の著名な絵については、私が語るよりは、直にご覧いただくのがいいだろう。

大原美術館と倉敷民芸館には、沖縄にも縁の深い河井寛次郎、バーナード・リーチ、濱田庄司をはじめ民芸関係者の作品がずらりと並ぶ。

倉紡記念館では、単に会社の歴史にとどまらず、日本のロバート・オウエン的な大原孫三郎らによる、労働環境、社会活動、大原社会問題研究所などの研究、文化美術活動などの紹介が印象的だった。

町並みには、クラフトなどの小物の店が一杯。購入したくなるものの続出だが、禁欲した。

町の歴史は、飛鳥時代、朝鮮半島からの阿知一族の移住から始まり、半ば海であった時代から干拓、商業、幕府代官時代、そしてクラボウ時代、さらに今日というものようだ。だが、町並みを歩く限り、大原美術館に象徴される文化が地域の文化とどうかかわっているのか、見だしづらかった。



川沿い

大原美術館

町並み

近くの阿知神社からの町風景





クラブウ建物 アイビー（つた）に包まれている。

2015年09月10日

## 岡山後楽園など 私の旅スタイル 旅2

一泊した倉敷の次は、岡山だ。15時前に到着したので、早速後楽園と向かった。三大名園のうちの一つだ。広く平らで、見通しがよい。

金沢の兼六園とは全く異なる趣だ。ここでも音声ガイドを聴きながら回る。三大名園とともに、江戸時代の藩主の庭園だ。



後楽園の隣に岡山城がある。写真の一番奥に写っている。

後楽園を回った後、隣接する博物館と城を見て回る。この周辺をカルチャゾーンとして、盛り上げているようだ。



岡山は全体としては、行政の中心都市的性格が強い。駅前にイオンモールや官庁街がある。この町は、全く平らで、自転車が活躍している。

駅からバスまたはJR津山線で10分足らずのところ岡山大学がある。戦前の陸軍の跡地にたてられたようだ。時間があつたので、大学もぐるっと一周。

私は旅先でも、よく歩く。今回も、一日平均一万歩以上歩き、そのうち一日は15000歩で、今年入ったの最高記録だ。

旅と普段の生活との違いは、お金がかかることだ。いつもなら、一日0～1000円なのだが、旅先では、3000～5000円ぐらい必要だ。加えて宿泊交通費がかかる。大都市で暮らしていたら、私の年金などの収入では赤字連続だろう。

このごろは、所用が終わると、さっさとホテルに戻る。夕食も、外ではなく、お店で買ってきたものを部屋で食べることが多い。そして、いつものように、9～10時には眠る。

年寄りらしくなってきたようだ。

2015年09月14日

### 神戸布引ハーブ園 旅3

今回の旅で、私にとって最高だったのは、神戸布引ハーブ園訪問だった。

神戸空港発が夕方だったので、それまでをどう過ごすかは、当日の判断だった。岡山を朝出て、9時前に新神戸着。目当てのハーブ園行きのロープウェイ始発9時30分、開園10時だったので、それまでは北野異人館あたりを歩く。最後の写真のように、有名な風見鶏の館などをさっとまわる。

ハーブ園の類は、旅の途中で出会うたびに入场見学してきたが、4時間も滞在したのは初めてだ。月曜日の午前ということもあって、訪問者は少なかった。大多数は大型クルーズ船で来たらしい中国からの観光者だった。

到着して回り始めてしばらくたつと、「ハーブガイドツアー」案内の放送が聞こえた。早速集合場所のハー





ブミュージアムに駆けつける。どうやら参加者は私一人のようだった。これ幸いにと、案内のハーブ専門ガイドに日ごろわからないことを沢山尋ねた。ガイドも沖縄に関心が深いようだったので、沖縄でのハーブについて、私もガイドの質問に答えるなど、有意義な交流会にもなった。

写真前ページ

ハーブミュージアム (下左)

ステビア一杯。 (下右)

このページ

一杯のヤロー (右上)

ボグセージ (左上)

ここで分かったこと、新発見のことをいくつか書こう。

- ・ニラもハーブだということ。ガーリックチャイブと呼ぶのだそうだ。
- ・クリーピングタイムは、グランドカバーとして活用できること。
- ・ローマンカモミールとジャーマンカモミールの違いと活用方法。
- ・フェネル類は、夏にショートカットして夏を越させるのがいいこと。
- ・ステビアは蒸れを避けるために風通しをよくすること。私の失敗連続の原因判明

- ・コヘンルーダは、ヘンルーダ＝ルーと同じものであること。
- ・クワンソウは、このあたりでは名前が知られていず、「やぶかんぞう」と呼ばれているものに近い事。

・チャイブは湿り気が重要なこと

・苗の植え付けをしている人に聞いたが、土はチップと馬糞を混ぜたものを使っていること。





ガイドツアーの当初テーマとは離れた会話を予定時間を大幅に超えてして、大満足だった。その後、レストランで、ハーブ尽くしのバイキングをいただいた。これもまた大満足だ。その後、ゆっくりと坂を下りながら、ハーブを見て歩いた。充実と大満足の4時間だった。

写真 前ページ下

巨大なオクラの花と実（沖縄の畑で見かけるものの数倍）

写真 このページ上

- 左 ハーブ園から見る神戸の街並みと海 空港も見える
- 右 神戸北野の風見鶏の館

2015年08月10日

## 久々に首都圏に出かける 旧東海道 川崎大師 多摩川 祭

9日まで、数年ぶりに首都圏に出かけた。結婚披露宴出席のためだ。

大都市への旅をできるだけ避けてはいるが、このところの他府県への所用に首都圏がなかったため、本当に久しぶりになった。18歳に東京生活を始めて以降、少なくとも2年に一回は出かけたし、普通は年数回は出かけていたので、こんなことは久しぶりだ。



人が一杯の様子、人と店、そして看板、さらに交通機関がひしめきあう。私の弱い呼吸器がすぐに反応する。喉・鼻、さらには目が、ここにとどまてはいけなると叫ぶ。信号待ちでは、交差点から離れたところで排気ガスを避ける。こうしたところでは生活できない私になっている。

所用先は川崎で、川崎駅前に宿をとったが、偶然、旧東海道沿いにあった。左写真には、旧東海道の案内



板などが写っている。これもまた偶然だが、しばらく前にテレビで川崎宿を放映していたのを見たので、関心があった。すっかり様変わりではあるが、道路や案内図が往時をほんの少し忍ばせる。

ちょうど、地域の祭で、みこしがでていた。

朝散策で、近くの川崎大師にでかけた。初めてだ。

その後、多摩川散策を楽しんだ。写真は、河口の羽田方面だ。かなり歩いた。その日は一万歩を越えたが、堤防の上で、空気がきれいなところだったので良かった。



2014年05月11日

## セントレアからの夕陽

6日夕方、セントレア（中部国際空港）で、搭乗待ちをしていると、夕陽が、伊勢湾の向こうの鈴鹿山脈に沈むところだった。飛行機、大型タンカー、鈴鹿山脈、夕陽が並んでいた。





沖縄の我が家からの夕陽も美しいが、ここの夕陽も美しい。こんな構図は、愛知にいた時、滅多に出会えなかった。

2014年05月10日

## 愛知・岐阜旅行 赤池の旧我が家

連休最後に、姉の13回忌法事のため、久しぶりに愛知岐阜に旅する。

どこに行っても人が多く過ぎて、違和感を覚える。連休末期の空港・満席の飛行機・空港からの電車・地下鉄、人の連続だ。地下鉄では、多くの人がスマホ画面とにらめっこだ。しばし前は携帯だったのが、様変わりだ。でも、休日なので、楽しそうなグループも目立ち、平日のように一人ひとりがばらばらに暗くなっていない点がいい。

泊まりはいつものように、私たちが住んでいて、今は娘たちが住む、愛知の赤池だ。

1991年からこの分譲住宅に住んだが、森と池・田に囲まれ、当時は隣の一軒以外は、視野のなかに住宅はなかった。その隣も引っ越しは1年後だったので、当初住んでいるのは私たちだけだった。マムシはいるし、タヌキもいたという話だ。タヌキらしきものは見かけたが、私には他の動物との区別はつかなかった。

そんなところだが、土地区画整理事業の工事が始まり、自然がどんどんなくなっていく。その最後の記念写真をとってきた。

上の写真は、森の中の旧我が家

下は、旧我が家から見た森や竹林の風景。見納めだ。こんな自然をこわすのは大変もったいないことだ。あと2～3年で景観が激変



するだろう。いやすでに激変している。写真は激変していないところだけを写したからだ。

2013年12月30日

## 鹿児島での出来事 火山灰など

鹿児島では、息子宅に3泊した。いくつかのできごとを書こう。

### 1) まず、噴煙をあげる桜島。

夜、息子と話していて突然鼻血を出してしまう。前回の鼻血体験はいつのことか、10年以上前のことだろうが、覚えていない。沖縄に戻っても、喉や気管支がざらざらする。卓球練習のあとついに気分が悪くなり、2日間ダウンしてしまった。インターネットのサイトで調べると、肺や喉が弱い人は火山灰に要注意と書いてある。私はその該当者だ。気にもせず、マスクもしないで長時間散歩をしたことが影響したようだ。おおいに反省。

2) 路面電車に乗っていて、席を譲られた。恵美子と二人で顔を見合わせたが、御好意を断るわけにもいかず、どうやら譲られたのが私のほうだったので、座った。少々ショックだ。でも、どうやら最近の私は老人雰囲気を出しているようだ。

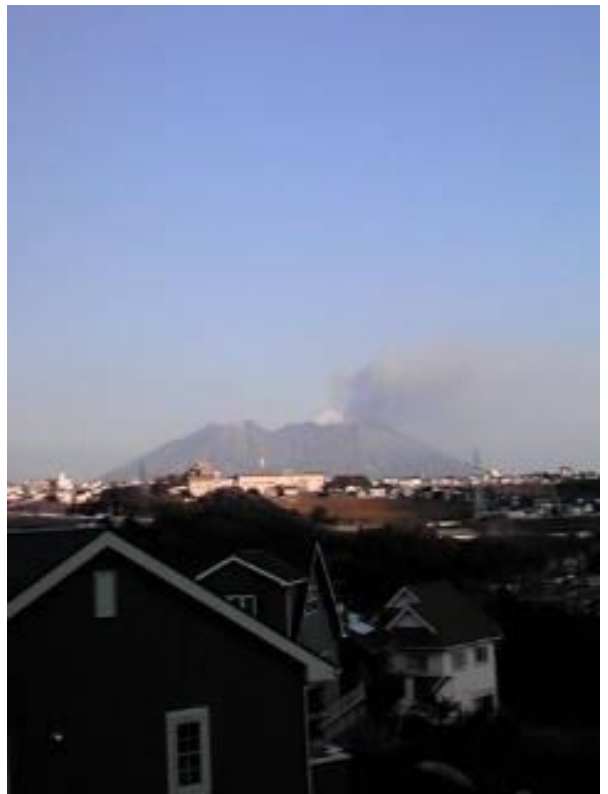
3) 孫たちの通知表を拝見する。3人ともよく奮闘していることが分かる。それにしても、沢山の記入欄がある。私の小学生時代と比べて倍以上の感じだ。担任教師は、この業務を遂行するのが大変だろう。

4) 通行する自動車が、ピカピカなのが印象的だ。軽自動車は少ない。息子が中古車を買ったことが珍しがられたそう。沖縄とは随分様子が異なる。

5) ジャスコに孫たちへのプレゼントを買いに行く。人の多さに、私は圧倒されて、要休憩状態になる。ここには、宮崎や熊本などからも客が集まると言う。

6) 対照的になっているのかどうかは知らないが、鹿児島の繁華街である天文館を歩く。その店の一つに蒸気屋というお菓子専門店がある。大変な種類のお菓子を製造販売している。そこで、一杯100円コーヒーを飲む。

おみやげをたくさん購入した。





屋久杉のふくろうの彫り物があったので、購入した。

2013年12月28日

## 大宰府天満宮



大宰府天満宮には、受験生とみられる若者、そしてその親がたくさんだ。写真では、祈願の順番を待っている行列がのびる。

「学業成就」というよりも、「受験祈願」ということになっていそうだ。

天満宮から、二日市、新鳥栖を経て、九州新幹線で鹿児島に向かう。初体験だ。ゆとりのある座席に驚いた。

2013年12月27日

## 九州国立博物館

先日、九州にでかけた際、行ってみたかった九州国立博物館を訪問。



素晴らしい建物だ。従来の博物館イメージとは異なる。欧米の博物館に似てきたな、という印象だ。

展示品は、地理的にも歴史的にも、すごく幅が広い。それらを観ながら、観る人が、いかに焦点化して、自分なりのものを発見構築していくかは実に多様になろう。焦点化がないと、展示物の前を数秒で移動していき、1時間足らずで、見学を終えるということになりかねない。私の印象では、皆さんの歩く速度は速い。

歳をとったせいかな、私は、途中でソファに座ったり、5分間ビデオ紹介を見たりと、いろいろとする。じっとみていると、職員が、「ここに

座ってもいいですよ」「もう一本ビデオがありますよ」などと、話しかけてくれる。ありがたい。

なかには、触れたり叩いたりしていい展示物もある。おそらくレプリカだろうが。銅鐸をはじめ叩いた。聖なる儀式に使用されたことがうかがえる。この部屋には、東南アジアの楽器の展示があったが、私は最近音楽とのかかわりがあるので、興味をもって見学した。集団が楽器で表現するという歴史は広く長いものであることを感じた。

私は、2時間余り見学したが、私なりの焦点化はというと、実はうまくいかなかった。あまりにも、展示物が多様でありすぎたかな、と思う。

余談だが、昼食をしないで入ったので、どこかカフェがなにかがあって食事ができるだろうと思ったが、適切どころが見つからなかった。ゆったりと時間をかけてみる人のためには、そんなのがほしい。

建物をでたところに、一流ホテルのレストランがあった。高くして私向けではなかったが、そこしかないので、遅い昼食をいただいた。

博物館から大宰府天満宮への通路は、巨大エスカレーターと歩く歩道だ。これまた従来の博物館イメージとは異なる。